

## 授業アンケートによるエクセレント・ティーチャーズ(平成 22 年度)

本学では平成 15 年度から、学生による授業アンケートの評価平均点が上位となった授業を担当した専任教員の氏名、科目名、授業構成の工夫等を「学生による授業アンケート結果」の一部として公表してきた。平成 17 年度からは、この授業担当者を「授業アンケートによるエクセレント・ティーチャーズ」(英文名称: 200x Hokkaido University Commendation for excellent teaching)と位置づけ、その上位者から、授業への取組・工夫等の報告を得て、紹介している。

### 平成 22 年度エクセレント・ティーチャー選定基準

1. 平成 21 年度後期授業及び平成 22 年度前期授業の学生による授業アンケートの平均値(総合評価)を対象とする。ただし、アンケート提出者が 9 名以下の少人数授業は対象としない。
2. 教員をその所属部局により文系・理系に分け、また、アンケート提出者数別に、10～24 名・25～49 名・50 名以上、の 3 つのクラスサイズに分け、総計 6 グループの中で 1. の総合点が 10 位までとなる授業の担当者をエクセレント・ティーチャーズと呼ぶ。
3. 各グループのエクセレント・ティーチャーズの上位 3 名から、授業の目的・内容、実行上の取組・工夫等についての報告を得て、紹介する。ただし、過去 3 年間に紹介した教員は除く。
4. 一人の教員が複数の授業で上位 3 名に入った場合は、すべての授業について報告を掲載する。ただし、対象者からの希望によって、一つの授業についてのみ報告を掲載することも可とする。
5. 3. 4. や退職等で報告のない授業がある場合は、次点の授業担当者とする。

教員から報告された授業への取組・工夫等については、授業アンケートに協力してくれた学生へのフィードバックを当初の目的として公表してきた。しかし、この資料は同時に教員の F D や教員相互の授業参照資料として、他に例を見ない本学の貴重な教育資産となっている。すでにこれまで、評価平均点上位者を講師として部局の F D が開催されるなど、学内的に活用されただけでなく、読売新聞(北海道版)がこれら公表された資料にもとづいて、本学の教育活動の様々な取組を連載紹介しており、広く社会に知られるところとなった。

公表に至る検討の経緯や公表方法に関する考え方等は、[平成 15 年度年次報告書\(第 1 部第 2 章『学生による「授業アンケート」について』\)](#)や[同別冊「学生による授業アンケート結果」\(PDF\)](#)を参照願いたい。

なお、授業アンケートは学生の視点からの評価であり、この指標のみが授業の質や教員の教育能力を示すものではないことを付言しておきたい。

# 平成22年度エクセレント・ティーチャーズ

| アンケート<br>提出者数 | 平均<br>値 | 部局                | 職名    | 氏名        | 授業<br>形態 | 全学<br>専門 | 必修<br>選択 | 授業科目名(講義題目名)         | 提出<br>数 |
|---------------|---------|-------------------|-------|-----------|----------|----------|----------|----------------------|---------|
| 文10～24名       | 4.78    | 留学生センター           | 教授    | 山下 好孝     | 演習       | 全学       | 選択       | スペイン語基礎              | 22      |
| 文10～24名       | 4.73    | 経済学研究科            | 准教授   | 岡田 美弥子    | 演習       | 専門       | 必修       | 演習                   | 11      |
| 文10～24名       | 4.71    | 法学研究科             | 特任教授  | 安藤 和宏     | 講義       | 専門       | 必修       | 現代法政論D／特) アメリカ著作権法   | 17      |
| 文10～24名       | 4.71    | メディア・コミュニケーション研究院 | 特任准教授 | ジェコンデ ニコラ | 演習       | 全学       | 選択       | フランス語入門:Initial1 (1) | 19      |
| 文10～24名       | 4.71    | 経済学研究科            | 教授    | 吉見 宏      | 演習       | 専門       | 必修       | 演習                   | 13      |
| 文10～24名       | 4.67    | 文学研究科             | 助教    | 宮下 弥生     | 講義       | 専門       | 必修       | ヨーロッパ言語文化論           | 10      |
| 文10～24名       | 4.66    | 高等教育推進機構          | 准教授   | 三上 直之     | 演習       | 全学       | 選択       | 聞く力・話す力のトレーニング       | 23      |
| 文10～24名       | 4.64    | メディア・コミュニケーション研究院 | 助教    | 金 銀珠      | 演習       | 全学       | 選択       | 韓国語演習(入門)            | 23      |
| 文10～24名       | 4.6     | 文学研究科             | 教授    | 佐々木 亨     | 演習       | 専門       | 選択       | 博物館実習                | 18      |
| 文10～24名       | 4.59    | 法学研究科             | 教授    | 山下 龍一     | 演習       | 専門       | 選択       | 演習Ⅱ                  | 14      |
| 文25～49名       | 4.79    | 法学研究科             | 准教授   | 吉田 広志     | 演習       | 専門       | 選択       | 演習Ⅲ                  | 29      |
| 文25～49名       | 4.76    | 文学研究科             | 准教授   | 橋本 雄一     | 演習       | 専門       | 必修       | 地域科学演習               | 31      |
| 文25～49名       | 4.58    | 文学研究科             | 准教授   | 野村 益寛     | 講義       | 専門       | 選択       | 外国語講読                | 27      |
| 文25～49名       | 4.58    | 文学研究科             | 教授    | 宮内 泰介     | 演習       | 専門       | 選択       | 地域科学演習               | 25      |
| 文25～49名       | 4.55    | 教育学研究院            | 准教授   | 大沼 義彦     | 講義       | 全学       | 選択       | 体育学A(トレーニング2)        | 26      |
| 文25～49名       | 4.54    | 法学研究科             | 特任教授  | 安藤 和宏     | 講義       | 専門       | 選択       | 音楽著作権ビジネス／現代法政論E     | 49      |
| 文25～49名       | 4.54    | 文学研究科             | 教授    | 宮内 泰介     | 講義       | 専門       | 選択       | 比較地域社会学              | 44      |
| 文25～49名       | 4.53    | メディア・コミュニケーション研究院 | 准教授   | 遊川 和郎     | 講義       | 全学       | 必修       | 中国語Ⅱ                 | 32      |
| 文25～49名       | 4.52    | 留学生センター           | 准教授   | 小林 由子     | 講義       | 全学       | 選択       | 外国人に日本語を教える          | 47      |
| 文25～49名       | 4.51    | 文学研究科             | 教授    | 佐々木 亨     | 講義       | 専門       | 選択       | 北方人類学                | 25      |
| 文50名以上        | 4.53    | 文学研究科             | 准教授   | 橋本 雄一     | 講義       | 全学       | 選択       | 都市地理学入門2010          | 149     |
| 文50名以上        | 4.52    | 文学研究科             | 准教授   | 橋本 雄一     | 講義       | 専門       | 必修       | 人文地理学                | 78      |
| 文50名以上        | 4.46    | 文学研究科             | 准教授   | 橋本 雄一     | 講義       | 全学       | 選択       | 都市地理学入門2009B         | 107     |
| 文50名以上        | 4.44    | 文学研究科             | 准教授   | 結城 雅樹     | 講義       | 専門       | 必修       | 文化心理学                | 114     |
| 文50名以上        | 4.38    | 文学研究科             | 准教授   | 樽本 英樹     | 講義       | 専門       | 必修       | 社会構造論                | 66      |
| 文50名以上        | 4.37    | 経済学研究科            | 教授    | 平本 健太     | 講義       | 専門       | 選択       | 経営管理Ⅰ                | 64      |
| 文50名以上        | 4.33    | 経済学研究科            | 教授    | 谷口 勇仁     | 講義       | 専門       | 選択       | 経営管理Ⅱ                | 151     |
| 文50名以上        | 4.32    | 高等教育推進機構          | 准教授   | 亀野 淳      | 講義       | 全学       | 選択       | 特別講義「大学と社会」          | 148     |
| 文50名以上        | 4.28    | 文学研究科             | 助教    | 猪瀬 優理     | 講義       | 全学       | 選択       | 社会学でみる現代家族           | 66      |
| 文50名以上        | 4.28    | 高等教育推進機構          | 准教授   | 亀野 淳      | 講義       | 全学       | 選択       | 特別講義「キャリアデザイン」       | 58      |
| 理10～24名       | 4.73    | 農学研究院             | 准教授   | 川村 周三     | 演習       | 全学       | 選択       | 食べ物が食卓に届くまで          | 22      |
| 理10～24名       | 4.71    | 歯学研究科             | 准教授   | 高橋 茂      | 演習       | 全学       | 選択       | 唾液のサイエンス～知られざるその能力～  | 23      |
| 理10～24名       | 4.7     | 触媒化学研究センター        | 教授    | 高橋 保      | 演習       | 全学       | 選択       | 有機合成触媒化学 体験コース       | 10      |
| 理10～24名       | 4.65    | 低温科学研究所           | 教授    | 田中 歩      | 演習       | 全学       | 選択       | 一般教育演習生物の環境適応        | 20      |
| 理10～24名       | 4.56    | 農学研究院             | 准教授   | 愛甲 哲也     | 講義       | 専門       | 選択       | 公共緑地学                | 15      |
| 理10～24名       | 4.55    | 北方生物圏フィールド科学センター  | 助教    | 加藤 克      | 演習       | 専門       | 選択       | 博物館実習・実務実習と事前事後指導    | 16      |
| 理10～24名       | 4.53    | 保健科学研究院           | 教授    | 傳田 健三     | 講義       | 専門       | 必修       | 精神障害学Ⅲ               | 15      |
| 理10～24名       | 4.5     | 保健科学研究院           | 教授    | 佐川 正      | 演習       | 全学       | 必修       | 一般教育演習               | 17      |
| 理10～24名       | 4.5     | 工学研究院             | 教授    | 千歩 修      | 演習       | 全学       | 選択       | かたち・つよさ・ちから          | 10      |
| 理10～24名       | 4.49    | 農学研究院             | 准教授   | 愛甲 哲也     | 講義       | 専門       | 選択       | 造園設計・計画論             | 15      |
| 理10～24名       | 4.49    | 地球環境科学研究院         | 教授    | 南川 雅男     | 講義       | 全学       | 選択       | 人類生態と環境              | 13      |
| 理25～49名       | 4.72    | 工学研究院             | 教授    | 蟹江 俊仁     | 講義       | 専門       | 必修       | 構造力学Ⅰ                | 32      |
| 理25～49名       | 4.58    | 保健科学研究院           | 助教    | 高山 望      | 講義       | 専門       | 選択       | セルフケア・リハビリテーション看護    | 28      |
| 理25～49名       | 4.56    | 触媒化学研究センター        | 教授    | 朝倉 清高     | 講義       | 全学       | 必修       | 基礎化学Ⅱ                | 29      |
| 理25～49名       | 4.55    | 情報科学研究科           | 准教授   | 野中 秀俊     | 講義       | 専門       | 必修       | 数値計算                 | 27      |
| 理25～49名       | 4.51    | 工学研究院             | 准教授   | 佐藤 靖彦     | 講義       | 専門       | 選択       | 構造力学Ⅰ                | 43      |
| 理25～49名       | 4.51    | 保健科学研究院           | 講師    | 溝部 佳代     | 演習       | 専門       | 選択       | クリティカルケア             | 30      |
| 理25～49名       | 4.5     | 農学研究院             | 教授    | 小林 泰男     | 講義       | 専門       | 必修       | 家畜栄養生理学              | 29      |
| 理25～49名       | 4.47    | 歯学研究科             | 教授    | 土門 卓文     | 講義       | 専門       | 必修       | 歯の解剖学(基本技術実習)        | 47      |
| 理25～49名       | 4.47    | 工学研究院             | 教授    | 羽山 広文     | 演習       | 専門       | 選択       | 環境と設備の演習             | 27      |
| 理25～49名       | 4.44    | 工学研究院             | 准教授   | 長谷川 拓哉    | 講義       | 専門       | 選択       | 建築生産                 | 49      |
| 理50名以上        | 4.69    | 保健科学研究院           | 准教授   | 宮島 直子     | 講義       | 専門       | 必修       | メンタルヘルスと看護           | 64      |
| 理50名以上        | 4.56    | 保健科学研究院           | 准教授   | 平塚 志保     | 講義       | 専門       | 必修       | 母性看護学援助論             | 60      |
| 理50名以上        | 4.51    | 保健科学研究院           | 講師    | 青柳 道子     | 講義       | 専門       | 必修       | ターミナルケア              | 65      |
| 理50名以上        | 4.46    | 理学研究院             | 准教授   | 澁川 陽一     | 講義       | 全学       | 必修       | 線形代数学Ⅱ               | 51      |
| 理50名以上        | 4.44    | 工学研究院             | 准教授   | 佐藤 敏文     | 講義       | 専門       | 選択       | 高分子機能化学              | 61      |
| 理50名以上        | 4.44    | 保健科学研究院           | 講師    | 矢野 理香     | 演習       | 専門       | 必修       | 生活援助看護技術Ⅱ            | 70      |
| 理50名以上        | 4.42    | 農学研究院             | 准教授   | 中京 治      | 講義       | 専門       | 必修       | 実験計画法                | 69      |
| 理50名以上        | 4.38    | 保健科学研究院           | 准教授   | 林 裕子      | 講義       | 専門       | 必修       | 老年看護健康論              | 61      |
| 理50名以上        | 4.37    | 工学研究院             | 教授    | 中村 孝      | 講義       | 専門       | 選択       | 新素材工学                | 72      |
| 理50名以上        | 4.37    | 水産科学研究院           | 准教授   | 山崎 浩司     | 講義       | 専門       | 必修       | 微生物利用学               | 51      |

アンケート実施者数: 文10～24名(108名), 文25～49名(111名), 文50名以上(55名), 理10～24名(146名), 理25～49名(418名), 理50名以上(237名)

今年度の「授業内容・工夫等」執筆者

スペイン語基礎 留学生センター 教授 山下 好孝

■シラバス

授業の目標 Course Objectives

スペイン語の初歩をマスターしたものを対象とする。スペイン語の基礎的知識をマスターする。

到達目標 Course Goals

直説法点過去形の動詞をすべてマスターする。これにより辞書を引きながらスペイン語の新聞が読める力を養成する。

授業計画 Course Schedule

- 10 月：再帰動詞
- 11 月：点過去規則形
- 12 月：点過去不規則形
- 1 月：他の時制の変化

成績評価の基準と方法 Grading System

毎回行う小テスト(50%)と期末テスト (50%)

■授業の取組・工夫等について

私が担当するスペイン語の授業に関して報告を書くのは今回が 2 回目である。1 回目は平成 15 年度の授業に関してで、その内容は以下のアドレスに掲載されている。

<http://www.hokudai.ac.jp/bureau/tenken/hokoku/2005/student-evaluation2/yamashita.pdf>

今回、改めて自分の過去の報告に目を通して見たが、基本的には授業の目標、内容などは 7 年前とほとんど変わっていない。しかし、この間大学の第二、三外国語を取り巻く環境が様々に変化してきている。あえて書かせていただくなら、外国語教育の「画一化」が進んでいるように思う。

北大の全学教育の外国語科目では

- 1) 統一試験の導入
- 2) 統一教科書の導入
- 3) 統一評価（相対評価）導入

が導入されるようになった。今後予想されるのは

- 4) 統一シラバスの導入

の導入で、どの先生も何回目の授業には何を教えるかが定められ、教師は淡々とメニューをこなしていくだけになる。そして最後には

- 5) 統一教師の導入

ということが現実のものになるかもしれない。すなわち画一化が進みすぎた某外国語科目は学生の人気を失い、履修者が激減し、担当教員の数が減ってしまう。最後の一人になった当該言語の担当者は結果的に「統一教師」になるのである。

このまま「画一化」の道を進むことが学生のためになるのだろうか。他方、学生たちも自分たちの利害に基づく「公平、不公平」を主張しすぎたためにこのような画一化の方向に向かっているのだと自覚すべきではなかろうか。

以上のような認識から「多様性」につながるスペイン語教育の実践を目指してきた。その一環として、北大の元同僚である森淳子先生と共同でスペイン語の教科書を作成した。その教科書には CD-ROM がついており、音声だけでなくイラスト画像なども入れた。それらを授業でも使っている。現在では、北大の全学教育で使用する各教室にはプロジェクターがすべて備え付けられ、マルチメディア教材が使いやすくなったからである。従来の紙製のフラッシュカードに加え、ノートパソコンに納めたマルチメディア教材を有効に活用できるようになった。

ただし、この開発した教科書はあまりに独自色が強いので、他の教育機関では全くと

っていいほど売れていない。

もう一つの工夫としては、スペイン語を話す留学生たちをお願いして、授業に来てもらっていることである。北大には 1400 名を超える留学生が在籍している。その中にはスペイン、中南米からも、たくさんの留学生が来ている。彼らを活用しない手はない。以上、報告と称しながら、私の日頃思っていることを書きつらねてしまった。お読みになった方の忌憚のない意見を聞かせていただけたら幸いである。

連絡先 yama@isc.hokudai.ac.jp

#### ■学生の自由意見（良かったと思う点）

- ・ PCを使っていたところ。先生の語り口が面白く楽しくスペイン語を学べたこと。発音・会話練習に重点を置いていた所。
- ・ 他のスペイン語の授業に比べて説明が丁寧であった。
- ・ たくさんしゃべるから、自然に頭に入ってきた気がする。
- ・ 大学の授業の中でも、最も親身な授業に感じ、楽しく受けることができました。
- ・ 教え方が独得だが、大変分かりやすかった点。動詞の変形の覚え方など、分かりやすく、学生のことを考えている進め方だと感じた。
- ・ 学生たちが積極的に復習するのを促すというのはとても良かったと思います。
- ・ 小テストをしてくれたのも、授業中にたくさんあててくれて積極的に全員が授業に参加できるようにしてくれたのも、とても楽しくてためになる授業でした。
- ・ 発音に重点を置いているので、過去形を発音によってうまく覚えることができた。
- ・ ひたすら楽しかった上、学習意欲も刺激されました。説明もわかりやすかったです。理解しやすい授業でした。ありがとうございました。
- ・ 山下先生は北海道大学一の先生だと思います！
- ・ こんな授業を大学で受けられるとは思ってもみませんでした。「双方向型」の授業とは何かを教えてもらったような気がします。
- ・ 独学では学ぶことが難しい、発音をチェックし直してくれる。効果的な語学の学習方法であると思う。
- ・ ・単語カードやPCの絵カード、単語のスライドなどがおもしろかったです。
- ・ スペイン語の基礎を1から学ぶことができた。応用よりも基本に重点がおかれていたので、わかりやすかった。
- ・ 繰り返し声に出して練習することで動詞変化が定着した。
- ・ 色々な工夫がなされていてとても面白かったです。
- ・ 発音の間違いをしてきしてくれた点。
- ・ スペイン語の文法と発音を詳しく教えてもらいました。
- ・ 先生がおもしろい！！すごかったのしかった。
- ・ 楽しかったです。まちがってもそれが楽しいところが良いです。
- ・ 大変面白く、スペイン語について、もっと勉強したいという意欲が湧いてきます。メキシコ、スペイン、さらにブラジルの世界についても伺うことができました。

## ■シラバス

### 授業の目標 Course Objectives

- (1) 文献講読により、経営学の基礎知識を学ぶ。
- (2) 個人あるいはグループでの報告を通じて、プレゼンテーションの方法を身につける。
- (3) 報告のポイントをつかみ、ディスカッションに参加する積極的な姿勢を身につける。
- (4) 卒業論文の作成により、文章表現力を高める。

### 到達目標 Course Goals

- (1) 経営学分野の文献を幅広く読み、経営学の知識や考え方を身につけるとともに、それらがどのように関連しているのかを理解できるようになる。
- (2) 文献を読むあるいは報告をする際に、その内容を具体的な企業の事例などで考えて理解し、説明できるようになる。

### 授業計画 Course Schedule

- (1) 経営学分野（経営管理論・組織論・経営戦略論・国際経営論・マーケティングなど）の文献を幅広く講読し、全員が報告の準備をする。
- (2) 3年生の後期から卒業論文作成の準備を始め、ゼミで定期的に経過報告し、4年生の冬休みまでに完成させる。

### 成績評価の基準と方法 Grading System

出席、報告の準備、ディスカッションへの貢献度、卒業論文への取り組みなどを総合的に評価する。

## ■授業の取組・工夫等について

### 1. 目標

本演習の目標は、次の4点である。第1に、文献講読により経営学の基礎知識を学ぶこと。第2に、報告者として、要点を整理し説得的なプレゼンテーションを行うこと。第3に、報告された内容のポイントをつかみ、ディスカッションに参加する積極的な姿勢を身につけること。第4に、上記の項目の集大成である卒業論文を作成する過程で、文章表現力を高めることである。

### 2. 内容

本演習の内容は、大きく2つに分けられる。1つは経営学の文献講読である。講読文献の選定に際し、まず経営学のどの分野から文献を選ぶのかを全員で話し合う。分野を決定するにあたり、学生がゼミに所属する2年間で、経営学の主要な分野を広く学べるように留意している。複数分野の文献を読むことで、それらの分野がどのように関連しているのかを、体系的に学ぶことが重要だと考えるからである。分野が決まったら、教員が選んだ数冊の候補文献を学生に回覧させ、全員の協議で講読文献を決定する。

もう1つは、企業のケースを題材にしたディスカッションである。文献講読や講義等で学んだ知識が深められそうなケースを掲載している雑誌等を教員が紹介し、ケースの選定は学生に行わせる。ここで学んだ企業の事例は、文献講読でのディスカッションをより具体的なものにしてくれ、さらには卒業論文のテーマ選びにもつながっている。

文献講読とケースディスカッションに加えて、年2回、テーマ選びから資料収集やプレゼンテーションの方法までを、学生が話し合って決めるグループワークを実施している。まず、学生が各自興味のあるテーマを持ち寄り、それらのテーマが2つあるいは3つのグループに分けて議論を展開できるか否か、関連する資料を集められるかなどを検討し、合議の上でテーマを決定する。テーマ決定後、学生は、一方で全員が共有する資料収集を行い、他方でグループ内での役割分担を決めて資料収集を行う。発表会までに、グループ内およびグループ間ですり合わせを行う。発表会では、パワーポイントを用いて各グループのプレゼンテーションおよび質疑応答を行った後で、全体を通してディスカッションを行

っている。

さらに、4年生の卒業論文中間報告も、年に複数回行う。4年生にとっては、同級生や3年生からの意見や質問が論文の完成度を高めることにつながり、3年生にとっては、翌年の卒業論文作成の参考になる。

### 3. 工夫

本演習では、報告者を事前に決めないというルールを設定している。報告者を事前に決めると、報告者以外の学生の事前準備が疎かになる傾向があるからである。また、学生が病気や就職活動等で欠席することがあっても、報告者を当日決めることで、ゼミ運営に支障をきたすこともない。学生は全員、報告者の役割を果たせるだけの事前準備（レジュメ作成も含む）をし、演習の開始時に、ジャンケンやくじで報告者を決定する。ただし、各学期で学生の報告回数がほぼ均等になるように、調整をはかっている。

報告者に加えて、文献講読およびケースディスカッションの司会も、学生が行うようにしている。教員が司会者の役割を果たすと、学生が教員に対して発言するハブアンドスポークの状況に陥るからである。司会者も、報告者と同じ方法で、演習の開始時に決定する。学生に司会を任せてから、学生間のディスカッションは、以前よりも活発になった。

年に2回実施するグループワークでは、学年のバランスやメンバーの顔ぶれが重ならないように配慮し、ゼミ生同士のコミュニケーションの促進に努めている。

演習を通じて、自ら考え行動する自主性や、自分とは異なる意見を受け入れながら議論する力を高めることを目指している。

### ■学生の自由意見（良かったと思う点）

- ・ 経営学の内容だけでなく、考える力、発言力、論理構成さらには人間力も養える。基本的に6行ではおさまります。
- ・ 学生同士が刺激し合える環境が整っていた。
- ・ 少人数で学ぶことにより、深い交流をもち、また学ぶことができました。
- ・ 輪読やディスカッションを通し、自分の力を上げることができました。
- ・ 先生が一番頑張っているところ。
- ・ 普通、言葉にはなりません。
- ・ 濃い時間を送ることができた。



## フランス語入門：Initial1(1) Mデイ・コミュニケーション研究院

特任准教授 ジェゴンデ ニコラ

### ■シラバス

#### 授業の目標 Course Objectives

外国語科目としてフランス語を選択している学生でも選択していない学生でも履修できます。基本的にはフランス語を初めて学ぶ学生を対象としますが、既習者のうちでも、これまでフランス人の先生と学ぶ機会のなかった人（具体的には1年次1学期の外国語科目フランス語Iまたはフランス語演習入門：初めてのフランス語1（第3外国語）を履修した人）も対象にします。フランス語を母語とする教師による演習ですので、ネイティブのフランス語に直に触れて、正しい発音を学び、耳と口の訓練を重点的に行いつつ、聴く・話す・読む・書くという四技能の基礎を身につけることを目指します。

#### 到達目標 Course Goals

正しい発音を身につけ、聞き取り能力、生きた会話力を習得して、きわめて日常的な状況でごく初歩的なコミュニケーションができるようになる能力を養うことを目標します。

また、異文化能力、フランス語圏についての知識を獲得します。

フランス政府のレベルテスト、DELF/DALFのA1を目指します。

#### 授業計画 Course Schedule

教科書に沿って、挨拶、自己紹介、好きなものを言う、評価する、質問する、情報を求める、値段を尋ねる、レストランで注文する、といった状況で必要な表現を学びます。文法事項としては、動詞のêtreとavoir、第1群規則動詞、冠詞、疑問文、否定文などを学びます。ペア練習、グループ練習などのさまざまな口頭練習、また読んだり書いたりする練習を行います。15回の授業で教科書の1、2単元（0課から8課）をやる予定です。

#### 成績評価の基準と方法 Grading System

演習形式の授業であるため、授業への積極的参加を重視し、授業参加度（出席率・講義への取り組み・小テスト・課題提出・発表等を含む平常点）50%、達成度を測る各種試験（筆記・口頭）またはレポート50%を目安に評価します。

具体的には、授業の中であらためて指示します。

評価は絶対評価とし、原則として総合点が90点以上のものを秀、80点以上を優、70点以上を良、60点以上を可としますが、この基準については、その都度必要な修正を加え、最終的な評価において、成績に極端な偏りが生じないように十分配慮します。

### ■授業の取組・工夫等について

#### 授業の目的と内容

この授業はまったくの初習者を対象にしています。学び始めたばかりの履修者に、新しく学ぶ外国語の内容を15回の授業で概観させることが目的です。この時間的な制限のために教育内容を縮小せざるを得ないのは確かですが、制限によって野心的な授業ができなくなるわけではありません。私は履修者に言語的能力や文化的知識を伝えるだけでなく、言語への関心や、フランス語あるいは他の言語の学習を続けたいという欲求を与えられるよう願っています。

そのために、私は言語に対する「行動的」なアプローチを採用しています。すなわち、文法を身につけるためだけにフランス語を学ぶのではなく、授業の中や外で自分を表現し、他者を理解する手段としてフランス語を学ぶことです。具体的にいえば、履修者は学期末には、たがいに挨拶を交わし、詳しい自己紹介を行い、友人や家族のような近親者を紹介することができるようになることが求められます。また私は言語のもつ文化的な側面を強調することによって、履修者が比較の観点から分析能力を発揮するよう促しています。

#### 授業運営

私は各回の授業について、そこで学ぶコミュニケーションの具体的な目的を定めています。それぞれの授業が終わったら、学生はフランス語で何か新しいことを「する」ことが求められるのです。とはいっても、それぞれの授業は連続しています。授業は毎回、前回

学んだ内容の確認から始まり、授業の終わりには復習の指示を与えます。このようならせん状の進行は、学生の規則的な学習を必要とします。そのため私は最初の授業の際に、履修に際して絶対に守らなければいけない三つの「鉄則」を定めています。すなわち、遅刻しないこと、前回までの授業で学んだ内容を身につけること、授業時間中は集中して授業に臨むこと、です。

さらに、履修者は受動的に授業を受けるだけではありません。言語的・文化的に必要な手段を学んだら、次はそれらを活用することが求められます。そのために準備の時間が15分間与えられます。この時間は、教師も手助けをしますが、学生自身が二人ないしグループで作業します。授業の最後に学生は、この作業の結果を他の履修者の前で発表します。

たしかに、間違いやそれに伴う恥ずかしさをしばしば恐れる日本の若い学生にとっては、このような方法は負担となるかもしれません。私は、あわてずに待ち、好意を示し、ユーモアを大事にすることで、彼らの不安を軽減するよう努めています。笑いも微笑みもない授業は、良い授業とは言えないでしょう…。

最後に、私は日本語を使うことを自分に禁じていません。履修者自身の言語を使うことによって—それが正当に使われるなら—多くの文化的・言語的な事実が明らかになり、教員の求めていることが明確になります。それだけでなく、授業の規律を維持しつつ教員と学生の距離を縮めることにもなるのです。

## 教師へのアドバイス

同僚の教師にアドバイスをすることは私にとっては難しく思われます。というのも、根本的にいって、良い教員とは何でしょうか？ 私は、良い授業の秘訣は、野心的な姿勢と現実的な認識の、厳しさと親切さの、ユーモアとまじめさの、教員による指導と自律的な学習のバランスにあると考えています。しかし、魔法のレシピは存在しません。集団はそれぞれ異なっており、教師には柔軟性が求められます。私が助言をするとすれば—おもに、日本人ではない私の同僚に向けての助言ですが、それだけではなく私自身にも向けての助言でもあります—それは、日本の学生の特性を考慮にいれ、日本の教育文化をよりよく理解することによって、行き違いを減らし、学生にとってと同様に、教師にとっても意欲を起こさせる授業を実施すること、となるでしょう。

## ■学生の自由意見（良かったと思う点）

- ・ 先生が面白く授業をしてくれるので、毎回なごやかで、積極的に参加できた。どの先生もニコラくらいに、茶目っ気があってほしい。
- ・ 先生が、とてもおもしろくて、授業が楽しかったです。
- ・ 発音が重要なフランス語で会話中心の授業を行って良かったと思う。
- ・ 先生。
- ・ 楽しかった。
- ・ クラスのみんなでコミュニケーションをとってたのしくできてよかった。
- ・ 生のフランス語を聞くことができた。会話の力が身についた。
- ・ 発表することで耳でフランス語を学ぶことができた点。
- ・ 楽しいし、理解しやすかったです。後期にも取りたい授業です。
- ・ 普通の話しをきくだけの授業とはちがって、皆集中してたし、授業の中でフランス語を学べて、成果を実感できる所。
- ・ 授業の中で学べて、成長を実感できる所。
- ・ たくさん話す機会があって良かったです。
- ・ 予習復習しないといけないので、すごく身につきました。
- ・ フランス語は難しいという概念を持って参加したが、分かりやすい教え方で楽しく学べた。
- ・ 使っている参考書には載っていない表現がたくさんでてきて面白かった。教員が身近にいる環境もよかった。
- ・ 先生と生徒の交流が多くて、とても楽しい授業でした。
- ・ しゃべんなきゃいけないからちゃんと覚えようとした。
- ・ ニコラ先生の授業は今まで受けた全学科目の中で一番おもしろかった！



## ■シラバス

### 授業の目標 Course Objectives

平易な英語で書かれた本ならば多読ということも可能だし、推奨されるが、ある程度語学的にも内容的にも高度な本であるならば精読することなしに、理解することは難しい。この授業では、個々の語彙の意味や文法をおろそかにしないでじっくり腰をすえて英語を読む訓練を行い、正確に英語を読む力をつけることを目標とする。

### 到達目標 Course Goals

語彙、文法に注意を払いながら、英語を正確に読めるようになることを目標とする。

### 授業計画 Course Schedule

- W1 ガイダンス
- W2 Ch.I The Distinctiveness of the Japanese
- W3 "
- W4 Ch.II Like and Unlike
- W5 "
- W6 Ch.III Traditions East and West
- W7 "
- W8 Ch.IV The Family
- W9 "
- W10 Ch.V Friends
- W11 "
- W12 Ch.VI Education
- W13 "
- W14 Ch.VII Jobs
- W15 "

### 成績評価の基準と方法 Grading System

平常点（小テスト+予習の度合い）に基づく。

理由の如何を問わず、欠席／遅刻が4回以下であることを単位取得の必要条件とする。

## ■授業の取組・工夫等について

### 1. 授業の目的・内容

この授業は、英語の高度な読解力を養うことを目的としたものである。テキストとして日本について書かれたエッセーである Donald Keene 著、The Distinctiveness of the Japanese を用い、教室では一文ごとに指名し、訳読させ、解説を加えるというオーソドックスなスタイルをとった。

### 2. 授業実行上の取り組み・工夫

この科目は、英語の教職免許状取得に必要な「教科に関する科目」に充当することができるため、英語・英文学専攻の学生が履修することが多いが、教職とは関係なく純粋に英語の読解力を高めたいという理由で履修する学生も多い。そのため、テキストとしては文学作品などではなく、学生にとって最大公約数的に関心をもてる「日本」に関する英文を読むことにしている。これは日本人として外国人と接する際、日本について聞かれることが圧倒的に多いので、日本のことを英語できちんと説明できるようになってほしいということも考えてのことである。

毎回の授業の最初に、前の週に読んだ部分に関して、単語と英文和訳の小テストを行い、成績評価はこの小テストと平常点（きちんと予習をして授業に臨んでいるか）を基に行った。毎回小テストを行うことで、学生の遅刻はほぼ皆無であったし、回収したテスト用紙を基にアトランダムに学生を指名することで、ある程度の緊張感を保つことができた。

さて、外国語の4技能であるリーディング、ライティング、リスニング、スピーキングは、2つの軸で分類することができる。1つは、受信・発信の軸で、リーディング・リスニングが受信、ライティング・スピーキングが発信ということになる。もう1つが、書き言葉・話し言葉の軸で、リーディング・ライティングが書き言葉、リスニング・スピーキングが話し言葉に関わる。書き言葉と話し言葉の大きな違いは、言語活動を行う上での時間的制約の緩急にある。書き言葉は時間的制約が緩く、じっくり読んだり、推敲しながら書くことができるのに対して、話し言葉は時間的制約がきつく、瞬時に反応しないとコミュニケーションが円滑に進まない。一般論として、時間的制約が緩い中でできないことが時間的制約がきつい中でできるわけではない。早い話が、読んでわからないものは聞いてわかるはずがないし、書けないことが口からすらすら出てくるはずがないのである。その意味で、外国語学習においては、時間的制約の緩いリーディングとライティングにおいてまず基礎力を養うというのは理に叶っている。一方、リーディングとライティングの関係は、前者が受信、後者が発信に関わるものである。これも一般論として、受信（インプット）による知識の蓄えなくして発信（アウトプット）はあり得ない。こう考えると、リーディングが外国語を習得する上で鍵を握る技能であることがわかる。

この授業では、こうした考えを説明した上、単になんとなく英文の大意がとれさえすればよしとするのではなく、アウトプットを意識しながら緻密なリーディングを行うよう学生に促した（かつての英語名人たちはこれを「英作文的読書」と呼んだ）。すなわち、(1)日本のこのことを外国人に対して説明するとき、こういう単語や言い回しを使えばいいのか、(2)この語彙・文法事項はこういう風に使うのか、といった意識を常に持ちながらテキストを読むよう促した。例えば、冠詞は英文の大意をとる上ではあまり気にかける必要がないかもしれないが、英語を使う段になると、定冠詞を使うか、不定冠詞を使うか、何も使わないかの選択を迫られることになる。そのため、教室ではテキストの文脈に即してここではこういう理由でこの冠詞が使われているのだといった説明をかなり詳しくおこなった。

### 3. その他

コミュニケーション重視の語学教育全盛の中で、訳読方式の授業は日本人の英語ベタの元凶であるかのように言われ、はなはだ評判がよろしくない。しかしながら、30名ほどの学生がこの授業を履修し、授業アンケートで高く評価してくれたということは、時代の趨勢に流されずに英文をきちんと読めるようになりたいと願う学生が文学部には少なからずいることを示しており、たいへん頼もしく感じられる。

#### ■学生の自由意見（良かったと思う点）

- ・ 疑問に思ったことを適切に回答して下さったこと。
- ・ inputとして重要な英語を“読むこと”と真剣に向き合える時間として、非常に有意義であった。
- ・ 丁寧に説明していただけてわかりやすかった。
- ・ 先生の人柄。
- ・ 教材が興味の持てるものであったし、難易度が適切で読み応えがあった。
- ・ 一文一文をていねいに訳していくことで英語の文章の理解を深めることができた。小テストを毎回行ったことで単語の知識が身に付いたので良かったです。
- ・ 教材の本の分量が多すぎず、内容も良かった。ただ、初版も1983年のもので、当時の状況が古く感じた。
- ・ 個々人に当てることで差異なく行われていたと思う。
- ・ ところどころで質問があるかどうか聞いてくれたり、英文中にある表現についてきちんと説明してくれていた点。
- ・ 毎回予習することで理解を深められた。教員の説明が分かりやすかったし、いつも気になる所を教えてもらうことができて良かった。
- ・ 一段落読むごとに質問の有無を確認したりと、進行が非常に丁寧であったこと。
- ・ “書くためには”を目的に、細かい点まで、使い分け方などを教えてもらえた点。

- ・ 細かい説明がわかりやすかったし、色々知ることができた。先生のコメントがおもしろかった。
- ・ 自分が今後どのように英語を学んでいけばいいか知ることができたから。
- ・ 教員の説明がわかりやすかった。話も聞き取りやすかった。
- ・ 先生の話がわかりやすくておもしろかったです。
- ・ 英語学習をより進んでしたくなった。知的刺激を受けた。この授業を取って良かった。
- ・ テストもレポートもないこと。
- ・ 英語を普段意識できない深いレベルまで探り下げて読解していくので、良かった。
- ・ 興味のわく題材だった。教材が安くてよい。1000円を切るのはありがたい。
- ・ 授業で使われた教材が、日本や日本人に関するものだったこと。

## ■シラバス

### 授業の目標 Course Objectives

環境と社会との関係をさぐる学問である環境社会学の考え方、手法を学ぶ。

### 到達目標 Course Goals

環境社会学・地域社会学の考え方や手法の基礎を身につけること、とくに関連した文献購読、聞き取り調査、資料収集、そしてディスカッション、さらには質的データの処理・分析ができるようになることが目標である。

### 授業計画 Course Schedule

(1) 人々は地域の環境とどうかわってきたのだろうか、(2) 人びとは地域の環境や社会をどうしようと考えているのだろうか、(3) 誰がどういう形で地域の環境保全やまちづくりの担い手になっていけばよいのだろうか。この3点を今年のゼミでは考えたいと思います。ゼミでは、このことを、文献購読（さまざまな事例の文献、環境社会学関連の文献）、聞き取り調査（フィールドワーク）、ディスカッションを通じて考えます。

とくに何回か聞き取りを中心にしたフィールドワークを行います（週末などを利用します）。

また、3年生以上は個人研究を適宜発表します。

### 成績評価の基準と方法 Grading System

演習への出席度・参加度と各種課題へのとりくみを総合的に評価します。

## ■授業の取組・工夫等について

### 1. 演習の目的

この科目は、文学部で社会学や地理学・社会生態学を専門的に学修している学生たち（2～4年生）に提供している演習科目である。これらの学生に対し、地域社会学・環境社会学の考え方や手法を身につけてもらうのがこの演習の目的である。ちなみに受講者は必ずしも4年次の卒論で私を指導教員にする学生だけではない（その割合は半分程度）。他学部や他専攻の学生も毎年何人か受講している。

演習において私が重視しているのは、(a) ディスカッションを通して考える能力を身につけ、(b) 文献・資料を読みこなす能力、そして (c) フィールドワークを通して現場で学ぶ能力を身につけることであり、この三者を有機的に修得することである。とはいえ、それらをバランスよく提供するのは言うほど易しくない。とくに (c) のフィールドワークをどう効果的にゼミで行えるかは、その年の状況によって大きく左右される。

### 2. フィールドワークの重視

2009年度は幸い、日高町役場からまちづくりへの協力を要請されたので、それをこのゼミの学生たちと一緒にこなした。日高町（旧日高町地区）において、これからの日高町について考えるというプロジェクトにゼミとして関わらせていただいた。（これは2009年度のゼミの前期と後期を通して行なったので、以下では通年のゼミについて述べる）

まず日高町の歴史や現状を文献から学び、現地を視察し、徐々に日高町の概要をつかんだ上で、住民たちとのまちづくりワークショップ（これは私がファシリテーターとしてかわった）に何度か参加し、住民たちと今後の日高町について考えた。学生たちは住民から学び、住民も学生から学んだ。住民たちと一緒に日高町を何度かめぐり、地域資源（地域のお宝）を再発見していくというプロセスにもかかわった。こうした参加は土日を使うこ

ともあったし、平日に車で学生たちを連れて行って参加することもあった（受講生全員ではなく、毎回都合のつく学生たち数人を連れていった。少なくとも一回は行くように促した）。現場での学びは大きい。私が学生たちに提供できることは、とにかく現場に学生たちを連れて行き、いろいろなコミュニケーションの場を設定することではないかとも思う。

### 3. 文献購読とグループディスカッション

一方、通常のゼミの方では、並行して、「地域社会」「環境」「まちづくり」をめぐるいくつかのトピックについて文献を読み、グループディスカッションを繰り返した。文献報告の際は報告者が必ず論点を提示し、それについて議論することが求められる。私からも各文献につき2、3の討議テーマを提示しておく（なるべく議論になりやすいテーマを設定することが重要）。幸か不幸かこの年は受講者が多く、32名ものゼミ受講者がいたが、こうした文献報告やディスカッションは5～6名のグループに分かれて行うことで学生たちの「参加」を促した（したがって文献報告は同じものを5人程度の学生が読んできて各グループで報告する）。日高町で見聞きしているものと関連するような文献を選び、それらが有機的につながるように仕掛けた。そうすることによって、学生たちは日高町の現場で見聞きしたことと文献上の議論とを関連させながらディスカッションすることができた。「こう書かれているけれど、日高町ではこうだった。だからこう考えればよいのだろうか」といった、リアリティをもった議論が生まれてきた。文献報告のグループディスカッションに加え、何かしらの課題を考えるワークショップ形式のグループディスカッションも何日か行なった。

グループディスカッションは、私の授業において（講義でもゼミでも）中心を成すものである。ピア・ラーニング（相互学習）の効果が大きいことは長年の教育で十分にわかっている。教員が「知識」をたくさん話すよりも、学生同士で議論する方が、よほど学生たちには学びになる。教員が行うことは、議論の場を設定し、適切な議論の素材・テーマを提供することである。素材はなるべくリアリティをもって議論できるようなものがよい（その意味でも「現場」はいちばんの素材である）。学生たちは実はディスカッションが好きである。私はずっとディスカッション中心の授業をしてきているので、3～4年生は比較的慣れていて、グループの中で議論をリードしてくれる。教員とTAは、グループを回って聞き、ときに「これについてはどう考える？」と、議論のポイントを提案する（ただし、教員やTAはなるべく介入しない方がよい）。

### 4. 質的データの分析も学ぶ

とはいえ、「現場」はそんなにすっきりした論点が簡単に出るものではない。複雑な「現場」から何を導き出せばよいか。それを学ぶため、やはり日高町でグループに分かれて12名の住民たち（主に高齢者）への集中的な聞き取り調査を敢行し、それを大学に持ち帰ってテープ起こしするという練習を行なった。さらに、質的データ分析ソフト（MAXQDA）を使ってテキストデータにキーワードをつけ、さらにそれを体系化していく質的データ分析法も学修した。現場で知り得たことを「分析」という作業は、ゼミで簡単にできるものではないが、ふだんディスカッションで学んでいる「問題点を引き出す」ということを活かして、現実のデータから何が言えるか、聞き取りデータから何が言えるかを、ボトムアップで積み上げる作業の練習をしたことになる。

### 5. 課題

本来であれば、1年間のこうしたゼミでの調査研究活動を報告書（ゼミ論集）にまとめ上げるまでできればベストであったが、2009年度はそこまでには至らなかった。（そのかわり、

私たちが参加した日高町のプロジェクトから『ひだからBOOK』という冊子が生まれた→  
<http://www.town.hidaka.hokkaido.jp/tourism/hidakara/hidakara.html>)

フィールドワーク、文献購読、ディスカッション、データ分析、これらを有機的に組み合わせることが社会科学系のゼミの理想的な運営だと言える。もちろん週 1 回のゼミでそれを全部やろうとすることは難しいし、最初からきちんと計画を組み立てることはなかなか難しい。実際私のゼミは毎年試行錯誤であり、走りながら計画を立てている。さらには、他の講義や実習との連携、学生の自主ゼミとの連携も課題だ。TA や鍵となる学生を使ってゼミ運営をすることが重要だが、それも毎年うまく行くわけではない。ゼミは「なまもの」であることがおもしろいところでもあり、難しいところでもある。

(参考)

・ 関連する私の教育・研究活動については<http://miya.let.hokudai.ac.jp/>を参照してください。

・ また、大学教育におけるグループディスカッション、ピア・ラーニングについては、バークレイ他『協同学習の技法』(ナカニシヤ出版) など参考書・理論書がいくつもあります。

#### ■学生の自由意見（良かったと思う点）

- ・ 様々な社会的問題を扱っていて、とても面白かったです。
- ・ MAXQDA（質的データ分析ソフト）の使い方を習得することができたこと。
- ・ いろいろなことを考えさせられて、すごい刺激になった。
- ・ ディスカッション形式の授業だったので、さまざまな人の意見を聞けたり、自分の意見を発言でき、知識を深めやすかった。
- ・ 日高のまちづくりに関わるなんてなかなかできないことなので、非常にためになった。
- ・ 非常に、学術的にだけでなく、役に立つことが多かった。面白いトピックも沢山あった。
- ・ 発言を促していた。
- ・ たくさん議論できたこと。
- ・ 学生による参加型学習を重要視している点で評価できる。
- ・ 学生同士で議論せたこと。
- ・ みんなの意見をいっぱい聞くことができて、すごく刺激になった。
- ・ 先生の説明の仕方。
- ・ 全員が授業に参加できる形でよかった。
- ・ グループで話し合うことが多かったので、様々な人の意見が聞けて、良かった。
- ・ グループ形しきであったため、発言がし易く、又、みんなの面白い意見をたくさんきけた点。
- ・ ・日高に行く機会をたくさん与えて頂いたこと。・ディスカッションで色々な人の意見を聞いた。

## ■シラバス

### 授業の目標 Course Objectives

- (1) 基本的なトレーニングの原理と実践方法を理解する
- (2) スポーツを通じた自然とのかかわり方とその実践方法・能力を高める

### 到達目標 Course Goals

- (1) 機器（マシン等）を使ったトレーニング方法とその原理を理解し実践する
- (2) ウォーキングやランニングを使ったトレーニングの方法とその原理を理解し、実践する
- (3) 歩くスキーの基本技術を体得する

### 授業計画 Course Schedule

1. ガイダンス
2. トレーニングの原理と方法
3. トレーニングマシンの方法と実践
4. ランニングとウォーキング(1)
5. ランニングとウォーキング(2)
6. サーキットトレーニング(1)
7. サーキットトレーニング(2)
8. サーキットトレーニング(3)
9. 歩くスキーの基本技術(1)平地滑走
10. 歩くスキーの基本技術(2)斜面での滑走
11. 歩くスキーによる学内ツアー

### 成績評価の基準と方法 Grading System

授業への参加度合い、学習内容の理解度および技術技能の習得度合いを総合して、秀、優、良、可、不可の5段階で評価する。

ガイダンスを含め、4回以上欠席の場合は不可とする。

## ■授業の取組・工夫等について

### 1. 授業の目的・内容

本授業の目的は、①基本的なトレーニングの原理と実践方法を理解すること、②スポーツ（歩くスキー）を通じ、自然とのかかわり方とその方法・能力を高めることにある。具体的には、トレーニング（体幹の筋力や全身持久力）を通じ、歩くスキーで約10km程度は楽に走破できることを目標にした。授業内容は、①トレーニングの時期（10月～12月）、②スキー技術の習熟を目指した時期とに分けて行った。また、授業のまとめとして、野幌森林公園での歩くツアーも実施した（16回目の授業、自由参加）。

### 2. 授業実施上の取組・工夫

#### （1）授業の構成

トレーニングの授業では、学生が自主的に実施する部分が多く、授業自体が個別学習に傾斜することが予想された。そのため、①毎回の授業を全員で行う部分（授業の始めに5分間走、最後に腹筋や腕立て等）と②個別にトレーニングを行う部分（中間部）とに分け、共通課題の上に個別トレーニングを積み上げる方式をとった。これにより、全体の運動量を少しずつ上げていけるよう工夫した。また個別のトレーニングについては、個人の「トレーニング・カード」を作成し、成果と課題の認識・評価をできるようにした。最後に個人データをまとめ、その効果を考察させた（レポートとして提出、評価の一部に使用）。

#### （2）工夫した点

トレーニングの授業では、単調な運動の繰り返しが多く、学習意欲が低下（＝飽き）しやすい。これについては新しい課題を定期的に提示することで対応した。ランニングや5



分間走時には、歩くスキーも想定した上でストックを用いたウォーキング（ノルディック・ウォーキング）を行い、その効果等を検討させた。また、巧緻性やバランスの向上を目的にトランポリン運動を導入し、簡単な技から複雑な技まで少しずつ指導した。さらにステップ運動等も加え、全体が単調にならないよう心掛けた。

ウェイト・トレーニングでは、2～3人一組になってトレーニング機器を順にまわる方式を採用した。これにより、測定時における筋力の違いやトレーニングプログラムの内容（フォームやスピード等）や成果を相互に確認しながら行うことができた。トレーニングの原理や方法については、学術的成果をわかりやすく翻訳し、実際のトレーニング場面に応用可能な形で伝えるよう心掛けた。

### 3. その他

私自身、トレーニングの授業担当は数年ぶりであったため、授業実施にあたっては本ホームページを改めて参照した。その中で特に留意し、心掛けた点は、①丁寧なフィードバック、②学生が課題を明確に認識・評価できる授業内容の構成（1時間ごとと全体を通して）、③学生との密なコミュニケーションであった。トレーニングの授業にあわせて、それらの視点を落とし込み、実践することが自身の課題であった。ただ、実際どれだけ実現できたかは正直心許ない。トレーニング原理に関する部分では、専門とする先生方に多くのアドバイスをいただいた。こうしたインフォーマルなFD活動が非常に役にたった。全体を通じて、初めて取り組む課題が多かったためか、学生の学習意欲は総じて高かった。歩くスキー時はいつも好天に恵まれことや最終日にキツネが出没したこと等、条件に恵まれた部分もあった。授業内容やシーケンスについては課題も多いが、今後の改善に生かせればと考えている。

#### ■学生の自由意見（良かったと思う点）

- ・ 体力がついた！！
- ・ 生まれて初めて、スキーをやったこと。よい経験になったと思う。ただし、非常に難しいと思った。
- ・ スキーたのしかったです。
- ・ 色々なトレーニングができた。
- ・ 色々なことができてたのしかったです！とてもよかった。
- ・ 筋トレができてよかった。
- ・ 無理せず運転できて、先生も優しくてよかったです。
- ・ 体力をつけることができた。また、クロスカントリーの楽しさを知ることができた。
- ・ スキーが出来ない人にもしっかり教えてくれていました。
- ・ ウィンタースポーツは初めてだったので楽しかった。
- ・ 明日、野幌に行けること！
- ・ スキー楽しかったです。
- ・ 筋肉が肥大化しました。
- ・ 効果的なトレーニングができた。クロカン楽しかった。
- ・ 体力がついた。

## ■シラバス

### 授業の目標 Course Objectives

- ・人間行動・心理と文化の関係について、国際比較研究や地域比較研究などの知見を通じて学ぶ
- ・集団や対人関係や自己に関わる心理過程や行動パターンの文化差とその原因に焦点を当てる
- ・本年度は、現在勃興しつつある、社会行動の文化差に対する社会生態学的アプローチを重点的に取り上げる

### 到達目標 Course Goals

- ・文化心理学と比較文化心理学に関する基礎的知識を獲得する
- ・文化と社会が人間の心理過程と行動に与えるインパクトとそのメカニズムを理解する
- ・異なる集団・異なる社会に対する相対性視点を獲得する
- ・自らが所属する集団や社会について、さらには自分自身について、他者の立場から見る視点を養う

### 授業計画 Course Schedule

- 1) イントロダクション、2)3)文化心理学・比較文化心理学の目的・概念・方法、4)文化と自己(1): 自己概念と文化的自己観、5)文化と自己(2): 自己高揚・自己批判、6)文化と自己(3): 適応論的アプローチ・信頼の文化差、7)文化と自己(4): 自尊心と適応、8)文化と表情、9)文化と思考、10)集団主義と個人主義(1): 従来の研究、11)集団主義と個人主義(2): 神話の崩壊と二つの集団主義モデル、12)まとめと質疑応答
- 授業中に実験の実習を行う。

### 成績評価の基準と方法 Grading System

最終試験 40 点＋読書課題 30 点＋実験・調査参加 30 点＝100 点。ディスカッションへの積極的参加を期待する。

## ■授業の取組・工夫等について

平成 22 年度前期の授業評価で良い学生評価を受けたとのご連絡をいただきました。大変うれしいことで、ありがとうございます。実は平成 16 年度にもほぼ同内容の講義で同様の文書の執筆を依頼されておりますため、下記の内容に新鮮みはないかもしれませんが、ご容赦下さい。

### ①授業の目的・内容

国際比較研究を中心とした、比較文化的手法を用いた社会心理学と文化心理学の研究を概説した。特に、個人の社会行動や社会心理過程などの文化差について紹介すると共に、マイクロ＝マクロ理論の観点から、そうした文化差が生じる社会生態学的環境要因の解明に焦点をあてた。この分野の研究史・方法論を概説するとともに、最新の研究成果や論点を紹介した。

### ②授業実施上の取組・工夫

- 1) 毎回の講義で、用いたスライド全てを配布資料形式で配布した。その結果ノート取りに注意と時間を取られることなく講義内容に集中してもらえたのではないかと感じている。
- 2) 授業中に実験やアンケート調査などの実習を行い、そのデータを学生自身に分析させたり、あるいは講師が授業終了後に分析し、後日分析結果をフィードバックしたりすることにより、この分野の研究が行われるプロセスを疑似体験させた。
- 3) すでに確定している知見ばかりではなく、過去数年間に新たに発見された現象、現在論争が行われており評価が確定していない理論、などを積極的に紹介することにより、科学的知識がどのように深められていくのかについてのプロセスの一端を伝えた。

- 4) 学生にとって身近な話題、それも特に学生にとって「耳の痛い話」を、講義内容と絡めつつ事例として積極的に用いた。この挑発により、学生を感情的にインボルブさせることを心がけた。
- 5) 本年度からの新たな試みとして、講義の最後にできるだけ多くの質疑応答の時間を取った。質問者には特製デザインの「発言カード」を手渡し、名前を記入して提出すると最終成績の一部に算入されるとの設定により、発言への動機付けを高めた。すると、非常に的確かつ重要な質問が続出し、しばしば時間切れで中断せざるを得ないほどであった。この質疑応答を通じて、受講生全体の講義内容に対する理解も深まったと思われる。一部の学生からは、「発言者のみへの得点付与は、シャイで発言できない学生への配慮に欠ける」との批判もあったが、「発言者は皆の理解を促進しているという意味で、講義に対する最大の貢献者である」と説明した。

### ③その他、他の教員の授業改善の参考となる事項

私が学部生の時代には、単純なことをわざわざ小難しく言い換えるような自己陶醉型の講義が多く、しばしば怒りを感じていたものです。コミュニケーションは伝わらなくては意味がないとの信念を胸に、「簡単なことを簡単に」「難しいことも簡単に」伝えることを心がけております。

#### ■学生の自由意見（良かったと思う点）

- ・ 毎回先生のお話がおもしろく文化心理学に対する興味が深まりました。課題で読んだ本もおもしろかったです。
- ・ 教授の声もとても聞きやすく、また講義内容や話も非常に面白かった。スライドや配布プリント、解説も適切で、毎回楽しみにしていました。ありがとうございます！（でもテストは怖いです…。）
- ・ 自分が参加した実験の結果報告を受けることで、興味・関心が高まったこと。
- ・ 質疑応答の時間があったのが良かったと思います。それと授業の中で行われたアンケートの結果が後々発表されるのも良かったです。
- ・ 質疑応答がよかった。質問も解答も、よかった。
- ・ 学生からの質問を積極的に促している点。
- ・ 日本と北米の人種間のことだけではなく、最後には個人の日常的な対人関係レベルにまで言及されており、とても役に立ちました。
- ・ 私たちがどんな質問をしても、先生は「面白い」といつもほめて下さったところ。
- ・ レジュメが配られること。どんな質問に対しても、先生の受け答えが丁寧。授業がおもしろい。
- ・ ポイントを押さえていてわかりやすい授業。実体験に基づいた説明→飽きることなく聞いていられる。スライドを効果的に使っている。
- ・ 集団主義の中でも集団間と集団内比較とで違いがあるなど、今まで知らなかったことをたくさん聞いて良かったです。
- ・ スライドもレジュメを見やすく、説明もすごく解り易くてとても興味深い授業でした。結城先生の授業をもっと受けたいです。
- ・ 大きな教室での授業でしたが、学生に語りかける形式が良かったと思います。
- ・ 教授の人柄が良かった。
- ・ 質問を受けつける時間を取っていた点。
- ・ ・ 授業の時間内に学生の質疑に回答する時間を設けたこと。・ 教員の説明が分かりやすかったこと。
- ・ 説明がとてもわかりやすかったです。
- ・ 先生が1人ひとりの質問に丁寧に対応してくれた点。
- ・ 毎回質問の時間があって良かったです。プリントもわかりやすかったです。内容もとても楽しかったです。
- ・ 質問への対応がわかりやすかった。文化心理学は面白い学問だという熱意が伝わってきた。余談で、外国の写真などを見ることができたのもよかった。
- ・ レジュメが詳しくてわかりやすかったです。
- ・ 非常に明快かつ刺激的な講義でした。
- ・ スライドがみやすい。先生の熱意が伝わってきた。カリスマ感が良いと思います！質問の答え方、話し方がすばらしいと思う。
- ・ 既成の認識を崩そうとする実験（「アメリカ人」≠「個人主義」）等は興味深かった。合意性の過大推

測の実験も面白いと思った。

- ・ 講義と配付資料が非常に論理的かつ明確で分かり易かった。研究に対する熱心さが伝わって来た。
- ・ 難しそうな内容もかみくだいて説明してくれた所がよかった。声がすごくききやすかった。
- ・ 面白い内容かつ、深みのある内容だった。学部でこんな専門的で内容のある授業は他に少ないと思う。
- ・ レジュメが分かりやすく、レジュメの内容についての補足説明もあったので、理解しやすかった。
- ・ 結城先生の説明はとても親切でよかったです。協力した研究のフィードバックがあったのもよかった。
- ・ わかりやすい説明。おもしろい事例の紹介。
- ・ 先端的な研究を紹介してくれたこと。実験に自分も参加出来たこと。
- ・ 学部生にわかりやすく説明していたと思う。
- ・ 先生の話が興味をひくような工夫してあって、とても楽しめた。
- ・ 教員の説明が分かりやすく、聞き取り易くもあった。
- ・ 先生が男前
- ・ とても説明が分かりやすかったし、内容もおもしろかった。
- ・ 現在行われている実験や調査の内容が紹介されて興味深かった。
- ・ 先生の話がわかりやすく、楽しく授業を聞けた点。現在の研究がどこまで進んでいるかも含めて、最新の情報を与えてくれた点。質疑応答によって学生の疑問を解消していた点。
- ・ 内容がとてもおもしろかった。たぶんこれから役に立つと思います。(2・3時間で消えてしまうのではなく)
- ・ 授業内で実験参加、&フィードバックがあり、講義内容に自ら参加している感じが良かった。また、質疑応答もあり良かったです。講義内容が写真や実際の様子などがわかるものが多くて、楽しかったです。米の大学を実際に見てみたいです。(デカイスタジアムと大学Tをきている人々とか)
- ・ 心理学の先生だからか、単元に入る前のつかみがすごくうまいと思った。発言カードがあることで質問をする大きなきっかけになったと思う。
- ・ 質疑応答がていねいでした。
- ・ 今まで学んだことのない分野の勉強だったので楽しかった。
- ・ 先生の話術が非常にレベルが高い。
- ・ 先生が親切丁寧で、質問の受け答えなどかしこかった。
- ・ 実際の差を知り、その差から生じる行動傾向、その研究手法を知る事で、身近な集団や人を考察するきっかけになった。大いに有益でした。
- ・ 内容は興味深いことが多くて先生の説明もわかりやすくしようとしているのが伝わってきてよかった。また、たまにおもしろい例を示してくれてよかった。
- ・ 質疑応答の時間がほぼ毎回あったところ。私はその機会を活かすことができませんでしたが、理解を深める一助になって良かったです。
- ・ 質問に丁寧に答えてくれていた点。
- ・ ・スライドでわかりやすかった。・実験で表現するからわかりやすかった。
- ・ 授業内容がすごくおもしろかったです。私は行動システム科学講座ではありませんが、こんなことも深く勉強してみたいと思いました。
- ・ 読書レポートやアンケート調査を評価に入れてくれたのはありがたかったです。
- ・ 文化間の差異だけでなく、その違いがもたらす行動の違いについて、深く勉強できた。
- ・ 説明がわかりやすく、また、学ぶことの意義についても考えさせてくれるような授業であつたので、より積極的にこの分野について学ぼうという気になった。個人的には読書課題が好きだった。ただ慢然と読むのではなく、課題を課されることで、より深く読むことができたと思う。
- ・ 説明がとても分かりやすく、内容も面白かった。
- ・ 研究の具体例が多く、概念ばかりの授業より理解しやすかった。授業の始めで、アメリカの学生の話を開けることが面白かった。
- ・ スライドがわかりやすかった。
- ・ 先生が熱心でわかりやすい説明をしていた。アメリカの大学で、大学グッズを着たり買ったりするという情報がおもしろくて興味をもった。
- ・ 毎授業後、質疑応答の時間が設けられていたために、色々な人の考えを聞くことができて良かったです。
- ・ 先生の説明がわかりやすかった。実験に参加できたのもおもしろかった。
- ・ 授業で取ったアンケートが必ずフィードバックされていた。課題図書が授業の理解を助けてくれた。適切な課題だったと思う。
- ・ アンケート結果のフィードバックや、質疑応答の時間が多くあり良かったと思う。
- ・ 文化について詳しく知ることができ、研究や実験からの内容から出されたアイデアが多かったので身

近に感じるような内容で良かったです。

- ・ いろいろなアプローチの研究を知ることができて良かったです。
- ・ 学生の質問への対応が良かった。興味の持たせ方がうまいと思った。
- ・ 日米の比較がとてもわかりやすかった。なるほど、と思うことも多く、おもしろい授業だった。
- ・ 自分が参加した実験の結果がでてその分析などをきくのが楽しかった。
- ・ 文化心理学の一般理論を説明しつつ、実証研究の紹介をしていたこと。
- ・ 菊と刀を読む良い機会になりました。名誉と暴力も面白かったです。
- ・ 興味深いテーマで面白く聞けた。話にユーモアがあって説明も聞きやすかった。
- ・ 大人数を相手にした授業にもかかわらず学生の授業参加を適切に促すなど教員の熱心さが伝わってきた。久しぶりに面白い授業だった。
- ・ 教員のわかりやすい説明と、質疑応答の充実している点。
- ・ 質問にいてねいに答えていた。質問の時間をとっていたこと。内容が面白かったです。
- ・ ・先生自身のアイデアや、学生のアイデア、自分のアイデアを、確認し、知り、理解しようとするチャンスが多分にあったこと。
- ・ 東アジアと北米の文化差等、もともと興味のある分野だったので、そのようなことについて深く勉強できて良かった。
- ・ 文化心理の概観的な知識が知ることができた点。
- ・ 授業の内容に沿って、具体例をたくさん挙げていただいたので、興味を持つことができました。資料の形式もノートを取りやすく、良かったです。質問の時間を取っていただけたのも理解に役立ちました。
- ・ 質疑応答の時間の先生の対応が大変よく、質問への返答にとどまらない返答は印象的であった。
- ・ 実験参加し、その結果を知ることができて良かった。読書課題は少し大変だったが、どちらの本もとても面白く、さらに深く勉強したくなった。
- ・ 先生が先徒への発言、質問を促していた点。また、先生も「わからない」ところは「わからない」と述べた上で、関連しそうな話題を提供してくれていたところ。
- ・ 授業内容がとても興味を引くものであり、説明もすばらしかったです。
- ・ 先生の話が大変わかりやすく、かつ刺激的で良かった。

## ■シラバス

### 授業の目標 Course Objectives

学部3・4年生レベルの、経営管理の考え方を理解する。

### 到達目標 Course Goals

最近の経営戦略、特に競争戦略と全社戦略の理論と実例を理解し、経営現象について自らある程度の分析ができるようになることが目標である。

### 授業計画 Course Schedule

以下の内容について講義する。

1. イントロダクション
2. 経営戦略とは
3. 競争戦略のとらえ方
  - 3-1. ポジショニングの視点
  - 3-2. 資源ベースの視点 (RBVF)
  - 3-3. ゲーム論の視点
  - 3-4. 学習および知識創造の視点
  - 3-5. 4つの視点の適用
4. 全社レベルの戦略
5. まとめ

理論だけではなく、事例を紹介しつつ講義する予定です。

### 成績評価の基準と方法 Grading System

試験＋レポート＋課題によって総合的に評価します。

出席はとりません。

講義中に数回、課題を出します（抜き打ちで課題を出すことはしません）。

ボーナス課題を出す場合もあります。

試験 50%、レポート 25%、その他課題 25%程度の配分を予定しています。

## ■授業の取組・工夫等について

### ささやかなオーディエンス志向

#### 1. はじめに

この原稿を執筆するにあたり、エクセレントティーチャーの皆様の取り組みや工夫を拝見した。まさにエクセレントであり、「むむむ!」「すごい!」「そうか!」と衝撃を受けた。それらと較べてしまうと、わたしの講義はごくオーソドックスであり、とりたてて紹介すべき点が多くあるとは思えない。講義の内容や工夫についても、平成17年度 (<http://www.hokudai.ac.jp/bureau/tenken/hokoku/2006/student-evaluation2/t11.html>) から大きく進化したわけではない。そこで今回は、講義の内容以前の、些細な心得について書きたいと思う。要約すれば、「ささやかなオーディエンス志向」ということだ。

これから書こうとすることは、多くの先生方にとっては当たり前のことかもしれない。そうだとしたら、どうかお許しいただきたい。

#### 2. 代々木ゼミナールと久米宏

大学院生時代、学費と生活費を稼ぐために予備校講師のアルバイトをしていた。初めての授業を終えると、その60分間を録音したカセットテープが反省材料として手渡された。自分が話している声を生まれてはじめて客観的に聞き、あまりの恥ずかしさに身悶えた。喋りは早口だし、声は妙に上ずって甲高いし、説明も独善的で回りくどい。

しかしこの背汗の経験が、その後の授業改善にはとても役に立った。できるだけ落ち着いてゆっくり話し、意識して声のトーンを低めに抑え、説明もなるべく簡明になるよう予

めしっかりと準備する。自身の弱点を客観的に把握して改善を心がければ、少しずつ補正が可能だ。あれから 20 年以上経つが、「教え手」としてのわたしの原体験はそこにあるのだと思う。

もう 1 つ、はっとしたことがある。あるインタビュー番組で、久米宏さんが「一流のニュースキャスターの条件は？」と尋ねられた時のことだ。久米さんは、こう答えた。『日本から北米に車を輸出する』という事実を伝えたい場合、無意識に手を右から左方向に動かせること。それがニュースキャスターの最低条件です」。

この意味がおわかりだろうか。わたしたちが日本で目にする世界地図の多くは、太平洋を真ん中にして左（西）側に日本列島、右（東）側に北米大陸が描かれている。この地図を思い浮かべると、「日本から北米に」という動きは、左から右となる。しかし、テレビカメラの向こうにいる視聴者から見ると、この動きでは逆だ。一流のキャスターたるもの、無意識のうちに、視聴者が想起するイメージに合わせて、「右から左方向に」手を動かさなくてはならないというのである。

これを聞いた時、講義もまったく同じだと思った。教員の方を向いて着席している学生の視点を考慮すれば、(いまや死語だが)「右肩上がりの経済成長」を伝えたい場合には、自身の左下から右上を示すのではなくて、右下から左上の方向に指示棒を動かすべきなのだ。

### 3. マイクとノイズ

大教室の講義では、マイクを使う。その際、マイクを口に近づけすぎると、ポップノイズ（息を吐く際に空気が振動する「ぽっ」「ざっ」という雑音）やリップノイズ（唇を開閉する際に唾液が鳴る「ぴちゃ」「っちゅ」という雑音）を拾ってしまう。片手にピンマイクを持ち、口元に近づけて話す人をたまに見かけるが、あれはまずい。ピンマイクは、襟元に付けた時に一番良く音を拾えるように設計されているからだ。

教室のスピーカーの配置等によっては、話者の声が十分伝わっていないように感じる場合がある。そんな時、マイクを口元に近づけて大声を出したくなる。だが、ハンドマイクであれピンマイクであれ、口との間に適切な距離（概ね 10～15cm）を保ち、ほどよい声量を発しなれば、ノイズを拾ったり音割れしたりする。オーディエンスにとって、ノイズや音割れほど耳障りでストレスフルなものはない。

声が届いているかどうか不安なら、後方席に座っている学生に確認すればよい。もし聞こえづらいといわれたら、マイクを口に近づけて声をはり上げるのではなく、アンプの音量を上げよう。

### 4. おわりに

上に書いた 2,3 のことは、文字どおり些細な心得に過ぎない。紙幅の都合でこれ以上は書けないが、他にも、教壇での立ち位置だとか、オーディエンスに対する視線の配分だとか、分かりやすいビジュアル・マテリアルの作り方など、講義の内容以前に心得ておくべき些細な事柄は、まだまだたくさんありそうだ。

講義の内容こそがもっとも重要であることに、異論はない。とはいえ、どんなに内容が素晴らしくとも、そもそもオーディエンスが聞く気になれないのでは意味がない。オーディエンスには、できるだけストレスのない環境下で快適に講義を受けてもらいたい。わずかな気配りで改善ができるのなら、そうする方がいい。

しょっちゅう指摘されることだが、われわれ大学教員のほとんどは、教授法を何も教わらないまま教壇に立つ。だからこそ、FD の入門編として、教員の誰もが心得るべき基本的事項を共有することが、きっと有意義なはずだ。ほんのちょっとした心得をいくつかわきまえるだけで、講義の質をぐんと高められるのだから。

### ■学生の自由意見（良かったと思う点）

- ・ ボーナスレポートがあるところ。

- ・ 説明がとても面白く、わかりやすかったです。
- ・ 先生の声がとても聞きとりやすかった。
- ・ 理論だけでなく、現実の企業のケースを学ぶことができた点。
- ・ とてもわかりやすくおもしろかった。
- ・ 授業前のおめざが面白かった。
- ・ レジュメがアップされる点。
- ・ 図がわかりやすかった。
- ・ レジュメをHP上にアップしてくれること。
- ・ わかりやすかった。
- ・ 平本先生の豊富な知識が聞けて、理解が深まった。
- ・ 成績評価の配分がちょうど良い。
- ・ 声が聞きやすかった。
- ・ 授業資料がパソコンでダウンロードできること。
- ・ 内容。先生の説明の仕方。
- ・ ・「おめざ」で企業等に関する雑学を毎回教えてくれた点。・授業の始めに前回の復習を少しした点。・スライドが見やすく、文字と図のバランスが良かった点。・レポートやテストの予告時期が早かった点。・映像教材を使った点。
- ・ 内容が面白く興味を持ちやすかった。多くの具体例があって分かりやすかった。
- ・ パワーポイントを使うところ。
- ・ ビデオで企業のことが知れたのがよかった。具体的な話が多かったのでわかりやすかった。知的好奇心が刺激された。
- ・ 先生の説明がとてもわかりやすく、聞いていて楽しかった。毎回のおめざのコーナーもとても良かった。パワーポイントも見やすかった。
- ・ 講義の内容について興味を持たせるような話も多かったので学習に対するやる気を起こさせてくれたと思います。
- ・ パワーポイントが効果的で、授業のテンポが良く理解しやすかった。
- ・ 話がおもしろい。ウェブで講義のレジュメがみれるのが良かった。授業に出れなくてもきちんと復習できるし、ウェブで見れば家で勉強しようと思える。抜きうちテストがないのも良かった。抜きうちがあると、そのあと頑張る気になれず、結局切ってしまうことになるから。
- ・ 具体的な事例をあげて講義を進めていくので、取っかかりやすかった。4つのアプローチは相互補完的な分析ということにおもしろみを感じた。
- ・ 実際の企業で実施されている戦略を見ながらの講義で飽きがこず、非常に興味深い授業でした。また、ビデオ資料の使われ方も良かったです。おめざも楽しかったです。
- ・ 担当教員の話し方が非常によくて聞きやすかった。内容もとてもおもしろいので、3年間受けた講義の中で一番おもしろかった。
- ・ 身近な企業の事例が出てきたので関心もてました。VTRが使われていたので飽きなかった。休講が多かった。
- ・ 図を使って解説してもらえるので、とてもわかりやすかったです。
- ・ 配布物やレポートが適切だった。
- ・ Power pointを使うことによって理解しやすいと思います。先生の説明は理解しやすい。事例は面白かったと思います。
- ・ レポート課題の内容がおもしろかった。
- ・ 今まで学んだ専門科目の中で一番興味をもって授業に取り組むことができました。経営に関する知識を与えてくれ、その知識を自分のものにする有意義なレポート課題だったと思いました。この講義を通じて、より経営について学びたいと感じました。
- ・ 計画に沿った分かりやすい授業。PPT、映像をもちいて、理論と実体をつなげてくれる。
- ・ 理論だけの説明だけでなく、豊富な具体例を交えての授業だったので、分かりやすく、記憶に残る授業でした。
- ・ Webページが充実していた。パワーポイントの使い方がわかりやすかった。課題にボーナスがあった。
- ・ 現実に近い経営現象についての話題が多く、説明もわかりやすかった。
- ・ 身近な有名企業を例として利用していたのでわかりやすかった。
- ・ スライドやビデオがわかりやすかった。
- ・ レジュメが大変見やすかった。
- ・ スライドがネットにUPされる点、パスワード入力で見れる点。
- ・ 具体的な企業例がたくさんあって興味が持てた点。

※「おめざ」とは、講義開始時、最初の10分ほど、広い意味で経営現象に関わるトピックを雑学的に提供するもの



## 食べ物が食卓に届くまで 農学研究院 准教授 川村 周三

## ■シラバス

## 授業の目標 Course Objectives

朝，昼，晩，私たちの食卓には毎日いろいろな食べ物が並びます。その食べ物のほとんどすべては農産物，畜産物，水産物から作られています。この授業では，農畜産物が収穫されてから食卓に届くまでの過程（収穫後の過程：ポストハーベストプロセス）と農畜産物の品質とについて理解を深めることを目標とします。

## 到達目標 Course Goals

食べ物に食卓に届くまでのポストハーベストプロセスの複雑さを理解するとともに，それを支えるために各種技術が利用され，さらに，より美味しく安全な食べ物を食卓に届けるために現在もなお先端的技术開発や研究が進んでいることを学びます。

## 授業計画 Course Schedule

授業では米，青果物，牛乳などの農畜産物が収穫された後，食卓に並ぶまでの加工貯蔵輸送プロセスや農畜産物の品質（食味）評価法などについて，最先端の研究や技術開発も含めて学びます。授業では以下のように1回に一つのテーマを取り上げます。授業の中の1回分は，農学研究院食品加工工学研究室を訪問し，研究員の4年生および大学院生から現在進行中のいろいろな研究について説明を聞きます。また，数人のグループで食べ物に関する一つのテーマを選び，そのテーマに関して自分たちで文献や資料を調査し，その内容を授業の中で発表します。

- ガイダンス：食べ物に食卓に届くまで
- 米の路：田んぼの稲が白いご飯になるまで
- 人間は高感度センサ：美味しさを測る官能試験（食味試験）
- 米の味：コシヒカリは本当に一番美味しいの？輸入米は美味しいの？
- 米は凍らない：新米の美味しさをそのまま保つ超低温貯蔵技術
- どこがちがうの？無洗米：無洗米と普通精米の品質および貯蔵特性
- いつまで美味しい精白米？：精白米の賞味期限の設定
- 農産物や食品の中身を知る非破壊品質測定：近赤外分光法と核磁気共鳴法
- 驚異の水の力：水（電解水）で野菜を殺菌
- 電気にシビレて菌が死ぬ？：食品の通電加熱における非熱的殺菌効果の有無
- 一年中おいしく食べられるジャガイモ：低温高湿度条件による生食用ジャガイモの長期貯蔵
- 研究室探訪：食品加工工学研究室の人たち
- 自分たちの研究テーマの発表(1)
- 自分たちの研究テーマの発表(2)
- 自分たちの研究テーマの発表(3)

## 成績評価の基準と方法 Grading System

毎回の授業の最後に，その回の授業の内容に関する小テストを行います。出席状況と小テストの結果により評価します。期末試験は行いません。昨年の成績は秀が86%，優が9%，良が5%，可が0%でした。

## ■授業の取組・工夫等について

## 1. 授業の目的・内容

私たちが毎日食べている食べ物、私たちが生きていく上で不可欠な食べ物が、生産地（農場）からどのようにして自分たちの手元（食卓）まで届けられているのか、を知ることが授業の目的にしています。

## 2. 授業実施上の取組・工夫

毎回の授業ごとのテーマ（シラバス）に沿って、1回で完結の内容をパワーポイントを使って話します。それと同時に授業内容に関する資料も印刷して配布します。これは、パワーポイントを印刷して配布する資料ではありません。

毎回の授業終了前に10分程度の時間をとり、出席票も兼ねた小テストをおこないます。小テストの問題は、その回の授業をチャンと聞いていれば、答が書ける内容です。それと

時に、その回の授業に対する意見や疑問質問を書く欄もあります。疑問質問には、次回の授業の最初の時間 15 分程度を使って回答します。したがって、パワーポイントを使って話をするのは、授業時間 90 分の内の 60 分くらいです。

授業の内 1 回を「研究室探訪」と称して、食品加工工学研究室（自分の研究室）の実験室を巡って各種の研究を紹介する時間にしています。この時は 4 年生と大学院生（留学生も含む）に実験機器の前で自分の研究の説明をしてもらいます。

授業の最後の 3 回は、「自分たちの研究発表」題して、5～6 人がグループで食べ物（食料）にかかわるテーマに関して調査研究を行い、パワーポイントを使って発表する時間にしています。この調査研究には各人が数時間以上の時間をかけており、またパワーポイントの作成にもかなりの時間をかけていると思います。その結果、毎年かなり「力作」の発表があります。この「自分たちの研究発表」のおかげで、文系や理系学部を超えた学生同士の友人関係も深まるようです。

### 3. その他・学生の皆さんへ

わが国では、300 万人弱（全人口の 2% 程度）の農家の人たちが、1 億 3 千万人弱の人口の食料の 40% 程度（カロリーベース）を生産し、残りの食料（60%）を外国から輸入しています。学生の皆さんも含めた私たちの大部分の人たちは、自分で食料を作っていないにもかかわらず、今のところ、毎日の食べ物には不自由しない（お金さえ出せば食べ物を買うことが出来る）生活を送っています。最終回の授業の「自分たちの研究発表」で、「自分たちの食べ物は自分たちで作る：日本の食料自給率」のテーマを取上げるのは、このようなわが国の食料生産の現状を知ってもらうためです。自分の国の食料生産の現状を知ってもらうことが「食べ物が食卓に届くまで」の授業の大きな目標の一つです。

台風や地震などの自然災害で電気・ガス・水道のライフラインが止まると、私たちは大変困ります。しかし、電気やガスの供給が 1 週間止まっても、不便な生活ではありますが、何とか生きていけます。ところが、水や食べ物の供給が 1 週間止まると我々はパニックになり、生きていけない人も出てきます。このように「食べ物が食卓に届くまで」のライフラインは、ほんとうの意味での「生命線」であることをこの授業の中で実感するように願っています。

#### ■学生の自由意見（良かったと思う点）

- ・ 自分の知らなかったことをたくさん知れてよかった。どの内容もとても興味をもつことができた。
- ・ 内容が自分達の生活と深く結びついていた分野だったため、理解しやすかったこと。宿題がなかったこと。
- ・ 普段何気なく食べている物が、どのように加工されてできるかというような特別なことを知ることができ、もっと知りたいという興味がわいたことはよかった。
- ・ 先生が質問に丁寧に答えてくれる。質問した以上の知識を得ることができる！授業が楽しい！！
- ・ 毎回の講義が関連したものでありながら、食に関して広く知識を身につけることができた。
- ・ 自分が今期うけた授業の中では、一番先生の声がはきはきとしていて聞きとりやすかった。
- ・ ジンパが面白かったです。授業もとても良かったです！
- ・ 大学らしい授業でとても楽しかったです。
- ・ とっても楽しい授業でした。大学では研究ばかりであまり教えることに対する熱意を感じない先生が多いが、この授業はそんなことがなく、とても満足しています。もう 1 回受けたい授業です。
- ・ 専門的な話が多かったが、身近な話題から広げていたので、わかりやすかった。
- ・ テーマ、授業内容など全体的に良かったと思います。ぜひこの講義を後に残して下さい。
- ・ 食品について興味があつたので、知らないことをたくさん知ることができ、経験できたのがよかった。
- ・ 興味のあるものを調べられた。
- ・ 先生にはいつも熱意が見られ、声も大きくとても分かりやすかった。
- ・ 身近な問題・話題について深くまで授業で教えてくれたので、非常にためになりました。
- ・ 食べ物には興味があつたが、栄養士になりたいわけでもなくどうしたら興味のあることを学べるのかわからなかったところでこの授業をとれて楽しかった。北大ならではの授業だと思った。（北大の研究成果も紹介するので。）

- ・ 非常に教員の説明がわかりやすく、私は法学部であったがおもしろかった。身近な問題であるが故に、気にしなかった問題について考えるきっかけになった。
- ・ パワーポイントを用いた授業で、ただ話をきくより内容が頭に入りやすかった。生徒にも授業をさせるというのが、生徒にとってよい経験になると思う。
- ・ 主にお米についてどれがおいしいのかということが知れて、お買い物の参考になりました。また、自分たちで調査し、発表するという機会は今後役に立つと思うし、また内容自体がどれも興味深くよかったです。

## ■シラバス

### 授業の目標 Course Objectives

化学の研究者を志す若者に、世界の最先端の研究を実際に体験してもらうコース。現在進行しているプロジェクトをわかりやすく説明する講義と、どのようにして研究が行われているかを見る見学会と、プロジェクトに参加して実験を行ない、英語での論文の書き方を習得し、可能であれば著名な学術雑誌に論文発表を行うという5段階で構成されている。これらの5段階すなわち（1）講義、（2）見学、（3）実験、（4）論文指導、（5）発表、を通して最先端の有機合成触媒化学の研究を実体験する。

### 到達目標 Course Goals

新しい実験を組み立て、その結果を論文にまとめる手法を身につける。

### 授業計画 Course Schedule

- ・オリエンテーション、体験コースの説明
- ・触媒化学研究センター研究室の見学
- ・核磁気共鳴分析装置の解説、デモ測定
- ・クロマトグラフィーの解説、薄層クロマトグラフィー (TLC) のモデル実験
- ・ガスクロマトグラフィー (GC)、高速液体クロマトグラフィー (HPLC) を用いた分析のモデル実験
- ・最先端の研究プロジェクトについての解説
- ・触媒的不斉合成反応、多環芳香族化合物合成反応の実施
- ・反応生成物の分離・精製
- ・生成物の同定・分析
- ・論文指導・発表会準備
- ・発表会

上記の予定は、状況に応じて適宜変更になる可能性があります。

### 成績評価の基準と方法 Grading System

実験と論文発表から総合的に判断する。

## ■授業の取組・工夫等について

### ① 授業の目的・内容

大学に入学したてのフレッシュな学生に、有機合成化学の世界の最先端の研究にふれてもらうと同時に、実際の実験に携わって興味を持ってもらうことを目的とし、毎回実験室で職員や大学院生と一緒に実験を行っている。そして最後に学生による研究発表会を開催している。

### ② 授業実施の動機

高校から大学受験を乗り越えて大学に入学してきた新入生は、世界の最先端に触れることができると期待して大学に通ってくるので、4月のころは目が輝いているが、実際には高校の延長のような授業が続くので、時間がたつにつれて次第に興味を失っていく。私も1年生のころ、最先端の研究に触れたくて、自ら化学の研究室のドアを叩き、実験をさせてもらった経験を持っている。そのときの経験が自分に与えた影響は大きく、それがきっかけでこの有機合成触媒の分野に進み、現在研究者として、北大教授としての自分に繋がっている。また当研究室の准教授も同様の経験をもっており、大学1年生の時に、世界の最先端に触れる経験を持たせることは、学生に生涯にわたってその分野への意欲をもたせる効果があり、そのような授業は大学のフレッシュマンに与えるもっとも効果的な授業になると判断し、この有機合成触媒化学・体験コースをスタートさせた。

### ③ 授業の内容

授業は実験を行うため、実験室で比較的小人数で行う。3人～4人のグループをいくつ

かつくり、それぞれのグループに職員、大学院生をつけて、具体的な実験のやり方を説明してもらう。各グループはそれぞれ全く違う研究テーマを行い、実際に当研究室で進めている研究テーマを題材として与える。授業の内容は非常に高度な知識を必要とするが、やさしく噛み砕いて説明をするので、学生のほとんどがついてくる事ができている。

#### ④ 学生参加・評価など

授業の最後には、学生による研究発表会を開催している。学生が自ら発表用スライドを作成し、持ち時間を持って、皆の前で、授業で行って研究について、内容、目的や実験結果を説明する。自ら説明することで、内容に対する理解度をさらに高める効果がある。評価はこの理解度と出席を重視している。

#### ■学生の自由意見（良かったと思う点）

- ・ 楽しい時間を過ごさせて頂きました。もともと好きな化学がより一層好きになりました。
- ・ 高校とは違う実験にふれることができとても良かった。この分野への関心も高まった。
- ・ 今までにない体験をすることができた。全体的に楽しかったです。
- ・ 最先端の実験にふれることができたこと。
- ・ 実験に携ってくれたみなさんは優しく、そして分かりやすく教えてくれました。非常に親近感をもてる講座で僕は一番この講座が好きです。
- ・ 実験。
- ・ 学部1年で、まだ教養の段階にいるが、その中で、4年以降で行うような研究内容をする事ができて、とてもよい体験だった。
- ・ 最先端の実験に触れたこと。生徒のことを良く考えている所。
- ・ 未知のものに触れた気がしました。実験は楽しかったです。高校時代にあまりやらなかったこともあって、毎週楽しみにしておりました。
- ・ やはり、最先端の実験を行わせてもらうことは、とても刺激になった。

## 構造力学Ⅰ 工学研究院 教授 蟹江 俊仁

### ■シラバス

#### 授業の目標、到達目標

複雑な構造物の挙動評価も、基本構造の理解の上に成り立っていることを学び、力や変形の定量的な把握の重要性を理解する。これにより、土木工学を学ぶ上において必要な構造力学の基礎知識を習得し、力学的センスと計算・解析能力を身につける。

#### 授業計画 項目（授業回数）／内容説明

##### 1. 構造力学の導入（2回）

一般力学から構造力学への移行を具体的に学ぶ。剛体の運動、ニュートンの運動法則、つりあいの力学、力に関する経験則、力のモーメントと偶力、力の合成と分解、構造物のはたらきについて考える。

##### 2. 静定構造物の支持と支点反力（3回）

構造系の支持の基本的な概念を理解し、構造物の支点条件に応じた支点反力が適切に求められるようにする。

##### 3. 静定ばりの断面力（4回）

基本的な構造であり、つりあい条件のみで解くことのできる静定ばりについて、その力学的な基本を理解した上で、仮想的な切断面に作用する力（断面力）の求め方を学ぶ。

##### 4. はりの影響線（2回）

はりの設計を念頭において、単位の荷重が載荷された時の位置と、その結果生じる反力や断面力の関係を、影響線に基づいて理解する。

##### 5. 断面の諸量（3回）

力によって生じるはりの変形とはりの断面形状の関係を結びつける断面諸量について学ぶ。断面1次、2次モーメント、図心、主軸などの概念を理解する。

##### 6. 技術者倫理とまとめ（1回）

学習した内容について整理しまとめるとともに、過去の建設事故等を通して、土木技術者の社会的役割について考える。

#### 成績評価基準・方法、教材、受講条件

##### 成績評価基準・方法

出席率により受験資格を絞り、期末試験により評価する。出席率が70%を下回る者は受験資格を持たない。試験は、構造力学Ⅰについての基本的な知識・理解をもっているかを基準に評価を行い、60点以上を合格とする。また、授業中に行う小テストの成績も、必要に応じて考慮する。評価基準は以下の通り。90点以上：秀，80点以上：優，70点以上：良，60点以上：可。

##### 教材等

担当教員が作成した教材を配布。

##### 受講条件

特になし。ただし、高校物理で習得した力学の知識は必要である。

### ■授業の取組・工夫等について

#### 授業の目的・内容

この授業は工学部環境社会工学科二年生を対象とした必修科目であり、工学部の他の学科にも共通する工学的基礎科目と位置づけられます。特に、学生にとっては学部専門教育が始まって最初の授業科目群のひとつであり、卒業までの間にしっかりと基礎力を培ってもらいたいと考えて授業に臨んでいます。取り扱う内容は、力学の基礎に始まり、「構造物にはどのような力が作用するのか」「また、それをどのように評価するのか」を考える「基礎的知識の習得と理解」が中心になっています。

#### 授業実施上の取組・工夫

##### 「もれなく、確実に」伝えたい

授業を実施する上で、「専門基礎科目」故のいくつかの配慮をしているつもりです。たと

えば、限られた授業回数の中で、教えるべき内容を「もれなく、確実に」伝えることです。この意味で、一連の講義シリーズを、各回ごとの「目標」と「ゴール」に沿ってパワーポイントにまとめておくことは、非常に効果的であるように思います。また講義テキストも、必要なことを無駄なく教えるという方針に沿った独自のハンドアウトを製本し、講義シリーズの最初に配布しています。これも、教員・学生双方にとって、講義の全体像の把握やその進捗率の理解に役立っているように思います。

授業の進め方自体には特別なことはありませんが、パワーポイントだけにこだわらず、板書もつとめて併用するようにしています。その方が学生の集中力も増すように思いますし、講義に使うパワーポイントのスライドをコピーして配布「しない」ことも、学生の集中力や授業参加意識を高めるように思います。

### 学生の「理解度」を確認したい

別の配慮としては、「学生の理解度」の恒常的なチェックです。毎回の講義の最後には10分程で解答できる小さなクイズを出題し、伝えたい内容が伝わっているのか、理解しているのかを確認します。これは出欠をとるためにも有効だと思いますし、思い通りに理解してくれている時は、教員にとっても大きな励みになります。一方もし、理解度が低い場合は次の講義の冒頭に解説を加えて理解を促進するというものです。この方法は、私自身が米国の大学院で学生として過ごした時に感心した経験に基づいています。

### その学問の「面白さ」を伝えたい

「基礎科目」は、学生にとって「単調」で「退屈」になりやすい傾向があると思っています。「これが何の役にたつのか?」「今後の学習にどう結びつくのか?」が不明だと、学ぶ側の意欲も減退しかねません。そこで、講義で扱うトピックが、学生の身近な生活や体験を通して理解できるような話題を用意して、講義の合間に紹介するようにしています。「なぜ、この構造物はこんな形をしているのか?」「その構造的な成立の秘密は?」といった具合です。写真や短い動画などを使いながら解説を加えるようなやり方です。

### **その他**

学生の授業評価が上がると、教員側の意欲も向上します。この講義シリーズも、そうした後押しを受けて、すこしずつ改善されてきたと思います。これからも、今回の評価結果を励みに、小さくとも確実に進化させ続けていきたいと思っています。

### **■学生の自由意見（良かったと思う点）**

- ・ 北大に入ってから一番わかりやすい、また受けていて楽しい授業でした。何より説明がわかりやすかったですし、将来的なことも話して頂けましたし、できることなら今後も担当して頂きたいなと思います。また、演習の回数や問題のレベルなども自分にとってはよく、理解を助けてもらえました。ありがとうございました。
- ・ 講義のパワーポイントの完成度が極めて高く、教員の説明も分かりやすい。講義用のテキストも分かりやすかったと思う。
- ・ 説明がとても分かりやすかった。演習とのバランスもよく、取り組みやすかった。
- ・ 説明がわかりやすかった。
- ・ 授業内容が聞き取りやすく、分かりやすかった。
- ・ 演習と並行して行っていったので、より理解度が深まる授業方法でした。
- ・ 他の講義と違い内容をつめこみすぎていないので、非常にくわしく説明していたところ。
- ・ 授業後のクイズは理解できてるか確認できたのでよかったです。
- ・ 教員の説明のしかたや話し方がとてもわかりやすくて、伝えたいことがとてもよく伝わってきたので理解もできたとし、講義に興味を沸かした。
- ・ パワーポイントが見やすかった。
- ・ 説明がとてもわかりやすかった。また、構造力学と日常の物との関連事項の話も興味深かった。
- ・ 授業に集中できるよう配慮されていたと思う。
- ・ 解説がわかりやすかったので、学びやすかった。・ P o w e r P o i n t が効果的に使われていた。

- ・ 構造力学という学問に初めて触れて、とても興味を持って学習できたと思う。ここで学んだ事を2やこれからに生かしていきたい。
- ・ ・説明がわかりやすく、AV機器等の使われ方が適切だった。
- ・ パワーポイントの使い方がよく、分かりやすかった。
- ・ 毎回の授業で、クイズという形で問題を解くのはよいと思います。また、もっと勉強したいと思いました。
- ・ 他の工学部などで似た講義を受けている人などと比べても授業内での理解のしやすさが圧倒的だった。また、余談などが学習意欲を高めてよかった。
- ・ わかりやすく、質問にも丁寧に答られていたところ。
- ・ テキストもスライドも分かりやすくて良かったです。僕は高校の物理は苦手でしたが、丁寧な説明で理解しやすかったです。
- ・ スライドで、テキスト通りに進んでいったので、授業も分かりやすかったし、復習もしやすかった。
- ・ 説明がとても分かりやすく、明快で非常によかった。
- ・ プロジェクターの使い方が良く、授業内容が理解しやすかった。
- ・ 演習では適切な問題が出されていた。
- ・ 授業のはじめに前回の復習をするので、わかっていないところを確認できるのが良かったです。



## ■シラバス

### 授業の目標 Course Objectives

1. リハビリテーション看護の概念やその特徴を理解する
2. 疾病や障がいによって生じる生活上の困難さを理解し、そのアセスメント方法を学ぶ
3. 生活の再構築に向けた具体的な看護支援について学ぶ

### 到達目標 Course Goals

1. リハビリテーション看護の対象となる人々や看護の概念について説明できる
2. 疾病や障がいによって生じる生活上の困難さを理解し、アセスメントすることができる
3. 生活の再構築に向けた具体的な看護支援について説明できる

### 授業計画 Course Schedule

- 1 回 90 分、7 回の講義または演習を行う
- 1-2. リハビリテーション看護における重要な概念について学ぶ
- ・リハビリテーションの概念とは
  - ・リハビリテーション看護におけるセルフケアとは
  - ・障害受容と疾病認識とは
  - ・リハビリテーション看護における生活の再構築とは
- 3-7. 疾病や障がいによって生活上の困難さを生じている人への具体的な看護支援について事例を通して学ぶ
- ・運動機能障害のある人への看護支援
  - ・排泄障害のある人への看護支援
  - ・嚥下障害のある人への看護支援
  - ・認知機能障害のある人への看護支援

### 成績評価の基準と方法 Grading System

1. 出席率は 80%を求める
2. 講義および演習の出席および参加状況、レポートの総合評価とする

## ■授業の取組・工夫等について

### ① 授業の目的・内容

本科目は、疾病や障がいによって、その人らしく生きることが困難になっている人々に対する看護の役割やアセスメント方法、また具体的な看護支援について学習しています。

内容は、2 コマ連続の集中講義で、講義＋演習を組み合わせたプログラム構成にしています。

講義では、リハビリテーション看護における重要な概念だけではなく、専門的な知識や技術が、実際にどのような事例にどのように提供されているのかを明示しながら、展開しています。

演習では、廃用症候群を予防するための起居動作や、摂食・嚥下障害のある人への食事支援について、実技的な演習をしています。開講時期が 1 年間の看護学実習をほぼ体験しているため、学生が自分自身の看護実践に引きつけて考え、統合できるように目指しています。

実際の授業では、遷延性意識障害患者に対する看護の取り組みを放映した V T R を視聴することから、自分の看護実践や看護観に引きつけて考えるように促し、学びを共有化することで新たな視点を発見し、深められています。

また、学生がリハビリテーションを必要とする患者への看護計画とその根拠をレポー

トすることで、情報収集や整理、クリティークといった能力の開発を目指しています。さらに、そのレポートを材料にして、グループでより良い看護計画を立案し、ロールプレースタイルで発表しています。

## ② 授業実施上の取り組み・工夫

特に、工夫している点は、専門的な知識や技術と看護実践を統合するという看護の志向性を、学生自身が身につけることを心がけています。また、少人数教育の利点を生かし、学生の意欲や積極性を促し、学生自身が能動的に参加する授業形態を考え、以下の点を工夫しています。

### ■ 学習者のレディネスを高める工夫

討議する前に、学生自身が事前準備できるように、早めに課題を提示し、考えをまとめる時間を確保するように心掛けています。

### ■ 双方向型授業の工夫

ディスカッションやグループワークでは、発表内容については、明らかに誤解している事柄以外はあまり口を挟まず、発表者と聴講者双方の理解が深まることを目指します。担当教員は、議論から看護の本質を見極められるように、話し合いをファシリテートしています。

## ③ その他

脳神経外科看護の豊富な臨床経験をもつ林裕子准教授の協力を得て、慢性疾患看護専門看護師である私自身も具体的で多くの事例を提示しながら、講義や演習を組み立てているので、学生自身が臨床をイメージしやすいのではないかと考えております。

### ■ 学生の自由意見（良かったと思う点）

- ・ 事例の紹介を多くしてくれたので、臨床をイメージしやすくて良かったです。技術演習も、実際の患者さんの気持ちを少し理解できたような気がします。
- ・ リハビリをどう捉えるのか違う視点で考えることの大切さを学んだ。現場で忘れられがちな考え方だと感じました。
- ・ 実際病院で行われていることをビデオでみることができた点。
- ・ 演習を通して学べることが多くて良かったです。頭での理解と、実際に行動した時の理解や問題にギャップがあることがわかりました。
- ・ 非常に面白く勉強になりました。
- ・ 実際に支援を行う際の方法や工夫点を多く知ることができました。また、多くの事例を通して実践的に学ぶことができました。
- ・ 積極的に学生が考えることができるような授業だったことや、とても興味深い話が授業でされていたことが良かったです。
- ・ 新しい看護の視点とVTR。
- ・ 実際の臨床での様子や先生の熱意がとても伝わってきて、やる気になる講義でした。
- ・ 新たな視点を得た。
- ・ 実技演習なども取り入れ、セルフケア・リハビリテーション看護を行う必要のある対象者に対する援助について、すぐわかりやすく学ぶことができたと思います。
- ・ 理論だけではなく実際の事例を紹介しながら講義を進めて頂いたのもとても理解しやすく、興味をもって話を聞くことができた。グループワークの数も適切で学生間の意見交換もできて良かった。
- ・ 内容が理解しやすく、興味をもって聴くことができました。

## ■シラバス

### 授業の目標、到達目標

数学的な諸問題を数値的に解決する数値計算アルゴリズムは、シミュレーションなどの多くの応用ソフトウェアの基盤技術として広く利用されている。本講義では、数値計算法の基本的な考え方とアルゴリズムおよびその性質を学習し、適切に応用できる素養を身につけることを目的とする。

### 授業計画 項目（授業回数）／内容説明

1. 導入とガイダンス（1回）  
数値計算の歴史と概要について学ぶ。
2. 数の表現と誤差（2回）  
計算機における数の表現、及び様々な誤差の概念に関して理解する。
3. 非線形方程式（2回）  
非線形方程式の数値解法について学び、収束の次数の概念を理解する。
4. 連立1次方程式（2回）  
連立1次方程式の様々な数値解法について学び、計算精度の概念を理解する。
5. 固有値問題（2回）  
固有値問題に関するいくつかの数値解法を学び、線形変換とその数値的な扱いの基本的な考え方を理解する。
6. 補間法（2回）  
補間多項式に関する代表的な手法を学び、計算効率の基本的な考え方を理解する。
7. 数値積分（2回）  
数値積分の数値解法を理解し、補外の効用について解する。
8. 常微分方程式（2回）  
常微分方程式の様々な数値解法について学び、公式の次数と精度の概念を理解する。
9. 定期試験（1回）  
授業内容の理解度を評価するための試験を受ける。

### 成績評価基準・方法、教材、受講条件

#### 成績評価基準・方法

期末試験の成績から達成度を評価する。出席率が 50%を下回るものは成績評価の対象としない。90 点以上：秀，80 点以上：優，70 点以上：良，60 点以上：可として評価する。

#### 教材等

講義に必要な資料を各回に配付する。

#### 受講条件

「線形代数学Ⅰ」，「線形代数学Ⅱ」，「応用数学Ⅰ」を履修済みであることが望ましい。また「コンピュータサイエンス演習Ⅲ」は本講義に対応した演習科目（必修）なので合わせて受講すること。

## ■授業の取組・工夫等について

### ① 授業の目的・内容

今回は思いもよらない評価を頂き、よろこんでおります。毎学期行われる「授業アンケート」の結果を真摯に受け止め、授業改善に役立ててきたお陰であると感謝しております。本講義の目的は、コンピュータサイエンスの原点とも言える数値計算あるいは数値解析の基本的な考え方とアルゴリズムを学習し、適切に応用できる素養を身につけることを目的としています。数学的な諸問題を数値的に解くための様々な手法を学びますが、それらの手法を単に覚えるのではなく、効率よく精度の高い計算を実現するための、先人たちのアイディアの蓄積と、その本質を理解することに主眼を置いています。

この講義は、連続した次の時間帯の演習科目「コンピュータサイエンス演習Ⅲ」と連動しており、講義の直後に実践的な復習を行えるようになっています。演習科目では、筆記による数式変形、電卓と筆算による計算、表計算ソフトによる計算、プログラミングなど、講義内容に応じて、週ごとに様々な形態で実施しています。

## ② 授業実施上の取組・工夫

演習科目と連動していることを考慮しながら、講義は黒板を使用したオーソドックスなスタイルをとっています。演習科目では助教の先生およびティーチングアシスタントの大学院生 2 名に協力いただいております。実施一週間前までに「演習問題」「解答例」に加えて、「講義の板書内容」を渡し、チェックしてもらっています。記述の誤りだけでなく、学生の立場からのわかりやすさについても指摘やアドバイスを得ることができ、講義の改善に役立っています。

不特定多数の受講生を相手に一方的に講義するという心理状態から抜け出すため、できるだけ早く受講生の顔を覚えるための工夫をしています。顔を覚えるためのよい方法は、名前と一緒に覚えることだと思います。講義時間内に出席者名簿をまわして、学生番号と氏名を記入してもらいます。講義終了後に受講生の顔を思い出しながら、着席位置と名簿の記入位置の照合をじっくりと行います。概ね 3 週間後には顔と名前が一致し、半年の講義が終わるころには、出席していたにもかかわらず氏名を記入しなかった学生や、誰が誰の名前を記入したかなどが、ほぼ特定できるようになります。点呼して顔と名前を一致させるというストレートな方法よりむしろ効果的だと思います。結果的に、教壇に立っていても、少なくとも本人は一人一人に語りかけるイメージで話すことができています。

## ③ その他

講義設計は学期全体だけでなく、毎回の 1 時間半がストーリーとして成立していることが重要だと思います。起承転結に限らず、論理的に一貫したストーリーが背後にあれば、受講生は 1 時間半以上集中力を維持してくれるものと信じています。私自身まだまだ改善の余地が多々あると思いますが、今後も授業改善の努力を続けていきたいと考えています。

### ■学生の自由意見（良かったと思う点）

- ・ 黒板の使い方が丁寧で、非常にとりくみやすい授業だった。
- ・ ノートがとりやすい。・ パソコンを使つての図形的な説明が分かりやすい。
- ・ 説明が丁寧で非常に理解しやすかったです。
- ・ 説明、板書などが大変丁寧で解かりやすかった。
- ・ 実際にプログラムなどで計算の様子やグラフを見せてくれたのがよかった。
- ・ 板書での説明に留まらず、実際にマシンを使用して実行結果を見せてくれたのが分かりやすかったです。
- ・ 例題のしょうかい、AV機器の使い方、復習。
- ・ 板書が整理されていて、ノートを取りやすかった。スライドや表計算ソフトを有効に活用していた。計画的に授業が進められ、遅れが発生しなかった。
- ・ 黒板、スライドの使い方が良かった。
- ・ スライド、プログラムなどを利用した計算の実演が非常にわかりやすかった。
- ・ 先生の説明が論理的で、学生に理解してもらうための説明だったのがとてもよかった。来年も同様に行えばよいと思う。
- ・ 板書の文字が大きくて見やすく、また消すのも早すぎなくて良かった。
- ・ 黒板の字がみやすかった。
- ・ 一貫して“理論→具体例→実践例”の流れで行われ、非常に分かりやすかった。
- ・ 字が大きくノートが取りやすく、説明もわかりやすい。またスライドを使ったシミュレーションのおかげでより授業内容への理解が深まった。
- ・ とてもわかりやすい。スライドの使い方が上手。
- ・ 計算の具体例をPCを使って示していた所。
- ・ 先生の教え方がとてもわかりやすかった。スライドの使い方がすばらしかった。

## ■シラバス

### 授業の目標 Course Objectives

線形代数学Ⅰに引き続いて、ベクトル空間と線形写像について講義をする。行列と連立1次方程式の理論が、ベクトル空間の概念を基礎とした線形写像の理論として明快にとらえられることを明らかにする。

さらに、線形写像の固有値を用いて、正方行列とくに対称行列を対角化する理論および計算法を修得する。

### 到達目標 Course Goals

ベクトル空間や線形写像の概念を理解し、行列とベクトルによる具体的な取扱いに習熟する。また、固有値を用いて2次、3次の行列の対角化を具体的に実行できる力を養う。

### 授業計画 Course Schedule

1. ベクトル空間：定義と例，部分空間
2. 一次独立と一次従属，ベクトル空間の次元と基底
3. 線形写像：行列との関係，階数，基底の変換
4. 線形写像の核と像
5. 行列および線形写像の固有値と固有ベクトル
6. 内積空間：定義と例，ノルム，シュワルツの不等式
7. シュミットの直交化，直交補空間
8. 対称行列の対角化と2次形式

### 成績評価の基準と方法 Grading System

授業目標に対する到達度を、次の観点から総合評価する。

#### <<評価の観点>>

- (1) 科目の骨格をなす定義・定理等の基礎知識を修得しているか。
- (2) 典型的な具体例について計算・構成等を適切に遂行できるか。
- (3) 基本概念や定理に基づいた論証を正しく行うことができるか。
- (4) 科目の中心的な考え方を修得し、全体にわたり内容を有機的に理解しているか。
- (5) 種々の問題を解決する際に科目内容を活用できるか。

#### <<評価の基準>>

秀：いずれの観点においても高く評価でき、極めて高い水準で目標を達成している。

優：大半の観点において高く評価でき、高い水準で目標を達成している。

良：いくつかの観点では良好に評価でき、目標をある程度達成している。

可：学習成果が認められ、目標の一部を達成している。

#### <<評価の方法>>

試験の成績および履修状況を総合評価する。

## ■授業の取組・工夫等について

### ① 授業の目的・内容および到達目標

線形代数学Ⅱは全学教育の基礎科目の1つで、線形代数学Ⅰに引き続き、ベクトル空間と線形写像について、その基礎理論を講義するものです。行列による線形写像の表現、正方行列の固有値、固有ベクトルなどを扱い、特に対称行列を対角化する理論および計算法を説明します。線形代数学Ⅰと比べますと、より抽象度合が高くなっております。

また、到達目標は「ベクトル空間や線形写像の概念を理解し、行列のベクトルによる具体的な取扱いに習熟する。また、固有値を用いて2次、3次の行列の対角化を具体的に実行できる力を養う」ことです。

### ② 授業実施上の取組・工夫、その他

本科目は理系学生の多くが履修登録します。さらに1つの学科を複数の教員で担当することもあることから、その目的・内容、到達目標などについては①で紹介したような大枠が定まっており、各教員はこれに従って授業を行います。よって、授業を通してこの内容・目標を実現する仕組みをいかに構築するかが私の工夫するところとなります。

到達目標を考慮して、本授業では具体的な行列に関する計算を中心とし、各学生の到達度を、主として中間・期末試験で測定することに致しました。結果、本授業での私の役割は「授業に真面目に取り組めば、主として具体的な行列に関する問題からなる中間・期末試験で一定水準以上の得点を上げられるように、授業を構成する」こととなります。

これを実現するため、以下のことに取り組みました。

1. 授業中に例題を紹介するなど、学生が問題と接する機会を数多く作るよう心がける。
2. 各授業の最初に、前回の授業内容に関する小テストを課す。その狙いは
  - 復習を促す。
  - 翌週に解答例とともに返却することで、問題に対する答案の書き方の1例を学生に示す。これを試験勉強時に利用してもらう。小テストは基本的に授業中扱った例題の類題を出題し、ノートのみ見て解答してもよいことにして、小テストが学生に過度の負担となることを避ける。
3. 中間・期末試験は、授業中に扱った内容（小テスト・授業中に配布のプリントを含む）からのみ出題する。
4. 最初の授業の際、各回の授業内容と教科書の対応ページを学生に周知する。
5. 最初の授業において、行列の対角化の応用であるマルコフ連鎖の問題を紹介し、授業内容への動機付けとした。

これらの取組は、いずれも私のオリジナルではありません。1, 2は多くの方々が既に実践されていることと思います（各授業の最初に小テストを行うことは、数年前の本学の出版物で紹介されていたと記憶しています）。3, 4は名古屋大学の「成長するティップス先生」（Web上で閲覧可能）と本学での指導、5は私の所属する理学部数学教室のFD講演会の資料（数学セミナー2008年4月号51ページ）を参考にしています。

今回このようにエクセレント・ティーチャーズに選ばれたことは、偶然にも上記取組が受講した学生とうまく合った結果ではないかと思っています。今後も自分なりの工夫を重ねていきたいと考えておりますが、その際、自分の授業のどこが良いか、何が足りないかを「見える化」してくれる1つの（しかし強力な）道具として、今後も授業アンケートを利用していきたいと思っております。

#### ■学生の自由意見（良かったと思う点）

- ・ 全体的に良かったと思うよ〜お。小テストがよかったです。
- ・ 大学で一番いい授業でした。
- ・ 説明がわかりやすく良かったです。
- ・ 毎回小テストをしてくれること。
- ・ 授業内で具体的な計算もんだいをたくさんやってくれて、もんだいのやり方が身につきました。
- ・ 授業で具体例があつてよかった。毎回テストがあるので集中してとりくめた。
- ・ 黒板の字の大きさも適切で、見やすかったです。毎日の小テストはとても有効だと思います。
- ・ 計画的に進められていて予習、復習共にしやすかった。
- ・ 字がとても見やすかったです。
- ・ 重箱の隅をつつくような解説を多くしてくれて、理解するのがとても容易だった。
- ・ 授業中に教科書の例題をやるので分かりやすかった。全体を通してとても分かりやすかった。
- ・ いいとおもうよ。
- ・ 学習すべき内容が明確でとても勉強しやすかった。
- ・ 毎回の小テストでしっかり復習できて、とても効率よくできた。とてもよかったです。
- ・ 先生の授業に対する準備や授業構成など、全てが完璧と言っているものだったと思います。本当に、半年間ありがとうございました。
- ・ 細かい途中計算も省略せずに解説していただけたので、わかりやすかったです。
- ・ 理解しやすかった。毎回テストがあつたので、授業がわかりやすかった。
- ・ 毎回、小テストを行うので、テスト前の負担が軽減され、集中できた。
- ・ ミニテストの難易度が適切だった。
- ・ 毎回試験があつたので、自習を積極的に行うことができた。
- ・ シラバス通りだった点。

## ■シラバス

### 授業の目標 Course Objectives

機能性高分子材料の化学構造と機能の関係を学習する。

### 到達目標 Course Goals

この授業により、機能性高分子材料の構造と機能の関係を理解する知識を身につける。

### 授業計画 Course Schedule

- 1, 耐熱性・高弾性材料 2回  
耐熱性、高弾性等の性質を有する高分子材料の合成法を学び、高機能材料としての特性を理解する。
- 2, 導電性・イオン伝導性材料 2回  
導電性高分子とイオン伝導性高分子の構造と機能の関係を理解する。
- 3, 磁性材料 1回  
無機磁性体と有機磁性体を学ぶことで磁性材料の機能を理解する。
- 4, 光機能材料 2回  
フォトレジスト、光ファイバーなどに使われる高分子材料を学ぶ。
- 5, 分離・認識材料 3回  
高分子材料による気体分離、溶液系における分離、分子認識材料などについて学習する。
- 6, 環境と高分子 3回  
地球温暖化と高分子、高分子のリサイクル、および生分解性高分子について学ぶ。
- 7, メディカル機能材料 2回  
医用分野で利用可能な生体適合性材料や薬物送達システム用材料などについて学ぶ。

### 成績評価の基準と方法 Grading System

成績の評価は3回の小試験とレポート提出により行う。成績は、基本的な高分子機能材料に関する基礎知識を持っているか、レポートの記述が説得的、論理的に展開されているかを基準に評価する。合格は小試験（3回の合計が60点）とレポート提出（40点）の合計が60点以上とする。成績が90点以上：秀、80点以上：優、70点以上：良、60点以上：可。

## ■授業の取組・工夫等について

### ① 授業の目的・内容

本講義では、身の回りの様々なところで使われ、生活を豊かにしている機能性高分子材料について、その化学構造と機能の関係を理解し、最終的に自ら新しい機能性高分子材料を分子設計できる知識を身につけることを目的としています。

授業は副読本を参考に作成したパワーポイントと配付資料を用いて行い、予習を含めたレポートが3回と「未来の機能性高分子材料」というテーマの最終レポートにより評価をしています。レポートに関しては、採点基準を明示するだけでなく、作成方法を丁寧に説明することで、将来必要となるレポート作成技術を指導しています。

### ② 授業実施上の取組・工夫（例：動機付け（学習意欲増進）、授業内容理解、学生参加促進、成績評価等）

授業では、特に下記のような心がけ・工夫をしています。

- ①パワーポイントと配付資料を使用することで板書を減らし、話に集中させる。
- ②予習を兼ねたレポートを作成してもらう。
- ③質問を投げかけ、学生自身が考える機会を増やす。
- ④化学全般に関する雑談を適度に入れることにより、学生をリフレッシュさせる。
- ⑤学生本人の将来の話をするすることで、学習意欲を増進させる。

パワーポイントと配付資料を有効的に使用することで板書の機会（学生の負担）を減らし、話に集中させる努力をしています。また、自らの板書機会を減らすことで、より多くの内容を紹介しています。パワーポイントの内容は配付資料と連携しており、作用機構等を丁寧に説明します。一方、重要な重合反応機構や作用機構は板書し、丁寧に説明することで理解を深めています（重要な内容はきちんとメリハリを付けて指導している）。

配付資料は事前に配布し予習を促しています。また、次に行う授業内容をレポートにまとめて提出してもらうことにより、あらかじめ授業内容の理解を深めておき、授業ではさらに詳しい内容まで説明するようにしています。レポートは採点基準を明示し、A4 版 2 ページ以内にまとめるようにしています。学生によってはたくさん調べ、何枚も書いてくる学生もいます。私の授業では限られたページ数で効率良く、かつ、読み手が理解しやすいレポートを作成するように指導します（色や太文字、下線の使い方や図の有効利用など）。

90 分の授業を何のメリハリもなく受講するのは辛いものがあります。私の授業では、はじめに前回の復習を簡単に説明した後、新しい内容に入るようにしています。また、学生が疲れてきた頃に質問や雑談を入れ、リフレッシュしています。さらに、「なぜ今、この内容を学習する必要があるのか?」、また、「なぜ、レポート作成が重要なのか?」という事を学生の将来と照らし合わせて説明するようにしています。

### ③ その他、他の教員の授業改善の参考となる事項等

今回執筆させていただけたことは、大変光栄なことであるが、自分自身は授業を上手く行えているという感覚は無い。実際に、学生からは改善点も指摘されており、毎回、試行錯誤している。学生は毎年代わり、そして彼らのバックグラウンドも変化しているので、同じ内容で授業することは難しいと感じている。このような学生の変化に対応するだけではなく、学生に取って受動的な授業ではなく、もっと能動的な授業に変えていかなければと考えている。私自身の授業スタイルは学生時代に習った先生方の良いところを採用しているだけであり、これからさらに自分自身で模索する必要がある。

#### ■学生の自由意見（良かったと思う点）

- ・ 高分子だけでなく色々な知識が手に入れたこと。
- ・ スライドと資料配布のおかげで、授業を聞くことに集中できた。
- ・ レポートを予習として利用するシステムは非常に有効だと思う。
- ・ 授業内容外の話が多く聞けて、ためになった。高分子の熱さが伝わった。
- ・ 高分子についてだけでなく、現在の化学者の状況をおしえてくれて良かった。お尻に火をつけてくれるところ。
- ・ レポートを出すことで、自分で勉強する時間ができた。
- ・ 将来を見据えて、レポートなどを書かせるところ。
- ・ 授業で学ぶ範囲をあらかじめレポートとしてまとめさせることで授業の理解度が高くなってよかった。
- ・ 試験がレポート形式の点。
- ・ 授業の内容以外でも、進路の話や研究室の話は、参考になった。
- ・ 生徒の士気を高めてくれる先生はそういないので貴重だと思います。今後の展望も具体的でとても良かったです。
- ・ スライドがわかりやすかったこと。説明がわかりやすかったこと。
- ・ レポートを書くスキルは向上したと思う。もっと枚数を多くしてもらいたかった。
- ・ レポート記述の練習が出来たこと。
- ・ 授業以外の話（研究内容、レポートの書き方など）もたくさんあってよかった。
- ・ 研究室に入ってから必要な能力について熱心に教えて頂きました。とてもわかりやすかったです。レポートも学習内容をさらに発展する内容であったのでとても興味がわきました。
- ・ 評価がレポートなのが良い。資料をプリントにしてくれたのがわかりやすかった。



- ・ 高分子についてあつく語っていた。
  - ・ 四年生や、修士に進んでからのことを聞いたこと。
  - ・ レポートの指導も受けることができた点がよかった。
  - ・ レポートの重要さをあらためて確認できた。
  - ・ 授業だけでなく、将来の自分について、考えさせられるような良い説明があつてとても良かった。
  - ・ 暗記や演習のくり返しではなく、自らで調べ、まとめるという形の最終レポートは非常に良かった。
- 教科書の知識を将来に生かさなければならないという自確が持てた。
- ・ 高分子化学に興味をもてました。
  - ・ 評価がレポートが主であったこと。
  - ・ 研究室についての話や、院についての話も聞いたので、今後の参考になった。
  - ・ 先生の雑談が面白かったです。モチベーション上がりました。
  - ・ スライドとプリントが見やすかった。
  - ・ 学生の将来へついて熱弁をふるってたところ。参考になった。・ 配布資料をくばってくれたのでノートをとらず説明に集中できた。・ 聞きとりやすかった。
  - ・ 何本かレポートを書いた点。今後の進路の話も聞いた点。
  - ・ 分かりやすい授業で大変良かった。レポートもプリントも内容が深かった。先生の話が面白かった。
  - ・ レポートの書き方など、授業の内容以外にも学ぶことが多かった。・ 教員の熱意が伝わってきた。
  - ・ パワーポイントと配布資料の2つが理解の手助けになった。レポートの採点基準を明確に示していた。

## ■シラバス

## 授業の目標 Course Objectives

対象者への質の高い、安全・安楽な看護技術の提供を目指し、科学的根拠を考慮した日常生活援助技術の原理・原則を習得する。さらに、グループワークと演習、実技評価等を通じて、日常生活援助技術を意図的・系統的、安全・安楽に実践するための知識・技術・態度を習得する。

## 到達目標 Course Goals

1. 日常生活援助技術の意義と目的を説明できる。
2. 日常生活援助技術が対象者に与える心身の反応について説明できる。
3. 対象者への事前の説明が適切にでき、理解を得るための過程をたどることができる。
4. 日常生活援助技術を実施する際に必要とされる観察点を説明でき、観察できる。
5. 日常生活援助技術を安全・安楽に実施するために必要な行動の根拠を説明できる。
6. 日常生活援助技術を実践する際に必要な物品の準備・後片付けができる。
7. ある状況設定の中で必要とされる日常生活援助技術の看護者の動作とその留置点を説明でき、実施できる。
8. 日常生活援助技術の実践を科学的に、また対象者の心身の反応から評価できる。
9. それぞれの生活援助技術について、自己の到達度と課題を明らかにすることができる。
10. 技術実施過程におけるリスクを認識し、安全に実施するための方法を考え、実践できる。

## 授業計画 Course Schedule

- 1・2. 排泄とその援助の意義と方法、その根拠につながる基礎知識の理解：ベッド上での排泄援助
3. 清潔と衣生活
4. 身体保清の意義と方法、その根拠につながる基礎知識の理解：入浴とシャワー浴
5. 身体保清の意義と方法、その根拠につながる基礎知識の理解：洗髪
6. 演習：洗髪（ケリーパッド・洗髪車）
7. 演習：洗髪（ケリーパッド・洗髪車）
8. 演習：足浴
9. 身体保清の意義と方法、その根拠につながる基礎知識の理解：口腔内保清
- 10・11. 演習：清拭（寝衣交換）
12. 食生活への援助の意義と方法、その根拠につながる基礎知識の理解：健康的食生活と食行動、食事援助の実際
13. 食事療法の理解：病院食の理解とシステム、NST と看護の役割
14. 病院の栄養部の見学
15. 病院の栄養部の見学

## 成績評価の基準と方法 Grading System

定期試験 50%、レポート・クイズ 10%、技術テスト・演習 40%で評価する。

## ■授業の取組・工夫等について

## 1. 授業の目的・内容

本科目は、疾病や障害などにより、日常の生活行動に支障がある対象者に対して、原理・原則に基づく、安全で、質の高い看護技術を習得することを目的としています。看護技術の実践には、常に対象者の心身の反応を観察し、対象者の立場を考えて行動すること、科学的根拠を理解し、自らの動作を効率的・意図的に組み立てて実践することが重要です。以上のことから、本科目は、演習科目とし、講義、映像教材の視聴、グループおよび自己演習、病院の栄養部見学、到達度を評価するための技術テストなどで構成しています。

## 2. 授業実施上の取り組み・工夫

(1) 技術実践に必要な知識を整理し、プリントおよび視聴覚教材を作成する。

初学者が、科学的根拠に基づく技術を習得する上で必要な知識について、複数の文献とVTR、最近の研究論文などを統合して、独自のプリント教材および視聴覚教材を作成し、

使用しています。

### **(2) 臨床の看護ケア場面がイメージできる工夫をする。**

医療に関するイメージが少ない学生たちに、看護の喜び、意味や目的性を伝えるために、文脈を大切にしながら、臨床事例を紹介しています。事例紹介の時は、学生たちが説明に聞き入っていることを筆者にも感じ取ることができます。技術演習では、教員が看護技術のデモンストレーションを必ず実践し、リアリティーさと患者に向かう姿勢が伝わるように取り組んでいます。また、北大病院の栄養管理部の協力を得て、病院食とチーム医療の実際を学ぶことができるように、栄養部見学を取り入れています。

### **(3) 技術習得に向けた自己演習へのモチベーションを高める。**

学生が自分の到達度と課題を確認し、達成感と自信を持って次の学習に取り組めるように技術試験を実施しています。技術は、『模倣』から『身につく』段階まで、段階性があり、学生が十分に身につけるには、時間と練習が必要であることは言うまでもありません。この練習が、看護技術の原理・原則に適った内容になるように、筆者の他に、良村教授、岩本准教授、渡辺助教、下田助教が学生の自己演習に積極的に介入しています。

## **3. その他**

### **・PC（パワーポイント）中心の講義は行わず、必要なポイントのみ板書する。**

以前は、PC（パワーポイント）を使用していましたが、教員が思っているよりも、学生に重要なポイントは伝わっていないと感じました。そのため、PCは、写真などの画像を提示したい場合のみ使用し、必要なポイントは板書しています。また、時には、教員が口頭で述べることを、自分で要約して記述するように促す、テキストや資料にマーキングするなど、授業がパターン化しないように工夫しています。

### **・90分の時間配分を学生の参加状況により考慮する。**

90分全てを集中することはできないことは明らかであることから、学生の集中状況に応じて、時間配分を考慮しています。最初の10分程度を、前回の授業の想起に使用し、学生の関心を高め、本題に入ります。学生の集中状況をみながら（45分程度を目安として）、指名して発表を促す、学生間の討議を取り入れる、雑談を取り入れるなどの工夫を柔軟に行うように努力しています。

以上、工夫点を紹介させていただきました。今回のアンケート結果は、学生たちの授業に臨む姿勢が反映していると考えており、それに応えることができるように、教育・研究に努力していきたいと思います。

### **■学生の自由意見（良かったと思う点）**

- ・ 実習では、患者側に立って、どうしてほしいのか自分で考える形が良かった。
- ・ 課題もあり、難しい部分も多かったのですが、とても理解しやすく多くのことを学んだと思いました。先生もとても熱心で気がひきしまり、勉強しようと思いました。
- ・ とてもわかりやすい説明でした。
- ・ 実践することが多い授業だったので楽しく取り組めた。
- ・ 先生の説明がすごくわかりやすかったです。
- ・ 全て。
- ・ とても勉強になりました。病院内見学も楽しかったです。
- ・ 実際に看護師になったときに大切なことなどを教えていただけて良かったです。
- ・ 矢野先生の体験談がとても良かったです。
- ・ 身がひきしまりました。がんばろうと思いました。
- ・ 実践的な技術練習があったこと。
- ・ 技術についていろいろなことを教えていただいたり、栄養部に連れて行っていただいたり、とても楽しい授業でした！
- ・ いろいろ実践的に行えて、楽しく授業できました。